

『着艦完了でやんす』

モデイが告げる。

じれったいほどの旅路を経てたどり着いたのは、『フェイオン』近郊に停泊中の臨時収容船だった。

『そら、どんな様子じゃ？』

急遽、備え付けた補助席から、ベルトを解いたサスが身を乗り出す。

と、モニターを凝視していたデミが鼻溜を振って返した。

『うーん、思ったより調子よくないみたい。認識してはもらえたけれど、このままだと偽造だつてバレちゃうかも』

現在、定員に合わせ霊柩船のコクピットには、この三体しかない。残るライオンはチタン製棺桶の中に、学芸会かとグチるスラーはトラと共にその棺桶を見守り、後部の納棺スペースへ身を隠していた。ゆえに今、到着を知らせてよこしたように、船の操縦桿はモデイが握っている。その隣、モデイのいつもの場所にはデミが腰かけていた。

『上書きしたような感じだから、きつと二つのファイルの折り合いが悪いんだね』

コクピット天井へ手を伸ばす。クリップに挟んで止めていたカードパソコンを、ヒ

ザの上に広げた。尻ポケットに忍ばせていたジャックを抜き出し、一方をパソコンへもう一方を霊柩船のメインコンピューターへ差し込む。フォローすべくキーボードを弾きながら鼻溜を振った。

『時間に制限がかりそうかの？』

向かってサスは問いかける。

『うーん、ぼくがついてたなら大丈夫だと思うけれど……』

『ちゃんと偽造データは消えるでやんすか？』

心配らしい。モディーもまた口を挟んだ。

『うん、それは大丈夫だよ。これなら他の入艦記録もいくつか吹き飛ばしちゃうかもね』

デミの返答は打って代わって力強い。

『ならば、ここはふたりにまかせたぞ。何かあった時は、いつでも船を出せるよう、スタンバイしておいてくれ』

そんなふたりへ、サスは鼻溜を揺らした。最後、デミの頭へ手をあてがう。

『え、それどういうこと？』

言葉にデミが驚いたことは言うまでもない。

『社長が信用するサスの頼みでやんす。モディーは、了解したでやんす!』

両目の動きと止めたモディーは隣で、伸び上がっていた。

置いてサスは、狭いそこできびすを返す。

『待つてよ、おじいちゃん! ぼくもおねえちゃんを探しに行く!』

背をデミは呼び止めていた。

『いいや、デミ。お前はここに残るんじや』

だが予感していたサスに、慌てる素振りはない。

『最初から、わしはお前を連れてゆくつもりになかったんです。お前はここでお前の仕事をしておればよい。あとはわしとトラで済ませてくる』

ハッチへと降りかけていたそこからゆう、と振り返り鼻溜を振る。

『そんなの……!』

などとデミも移動中、これでもかと戦意に闘志を詰め込んでいた。削がれてサスを睨み返す。だがサスは相手にしない。それ以上目を合わせることなく階段を下りていった。

『もうっ、おじいちゃん!』

ならその隣から消耗した船の燃料系を補充すべく、モディーもまた抜け出してゆく。

取り残されて立ち上がりかけ、不安定な偽造IDにかなわずデミキーボードへ両手を乗せなおす。

『みんな、そんなのひどいよ……』

『待たせたの！』

聞こえるはずもなく、霊柩船を降りたサスはその船尾へ回り込んでいた。納棺スペースのハッチを開いて意気揚々と鼻溜を振る。

なら立体収納ならば最大二十四体は可能なそこで、かぶっていた酸素マスクをトラとスラーは引き剥がしてみせた。その手ですかさず、スラーは棺桶の窓をノックする。いわずもがなそこにはアルトが、いや、アルトを装ったライオンは横たわっていた。中で閉じていたまぶたを開くと、覗き込むスラーを両目でとらえる。しかしながら窒息しないそのワケは、棺桶の足元に忍ばせておいたボンベとフィルタールのおかげだった。

『中也大丈夫だ』

確認したスラーが返す。

『でなければ、困るわい』

笑い飛ばしてサスは身を反り返す。

『ともかく奥の機材を運び出してくれんかの。デミはなんとかなるようなことを言っておつたが、いまひとつ偽造IDの調子がよくないらしい。バレんうちに済ませてしまわんとマズいことになりそうじゃ』

『分かった。力仕事はわしに任せろ』

かつて出たトラがさっそく身をひるがえした。納棺スペース奥の機材を、抗Gネットから解いて外へ押し出してゆく。キヤスターに乗ったそれは、サスの身の丈をゆうに越す黒塗りの四角い箱だ。それをトラは、管制端末の傍らへ据え置いた。

『この辺でいいか？』

『十分じゃ。よし、なら今から艦内を見せてもらおうとするかの』

両手をこすり合わせてサスは、管制端末を見据える。

『いまさらハッキングはヤバイんじゃないのか？』

などと、スラーはらしくない。

だがついに管制端末の裏へ手を伸ばしたサスの鼻溜は、愚問だと言わんばかり揺れていた。

『何を言いおる。そのために、このドデカい箱を持ち出したんじやろうが。落ちてくる情報を閲覧するだけじや。こちら側からは仕掛けたりせん』

幾度とない開閉に甘くなっていた管制端末、メンテナンス用のカバーを剥がしにかかる。中からケーブルが溢れんばかり飛び出したなら、指でより分けサスはそのうちの数本を特定してみせた。執刀匠よろしく、スラーへ手だけを差し出し誘う。助手をつとめてスラーはその手へ、黒い箱から伸びる色とりどりのクリップがひと束にまとうげられたケーブル、そのうちの一本を握らせた。

『これは一番だぜ……。って、落ちてくるつたつてなあ』

呆れて吐いた言葉は尻切れトンボだ。おかげでようやく飲み込めたらしいトラが変わって、会話へ割り込む。

『まさかここへ、この船の全情報が落ちてくるというのか？』

『にも耐えうるよう都合したが、じゃが船内のマップなら比較的オープンな情報じや。バーストする前に、めぼしはつくどわしは思うとる』

順序よく、管制端末の狭いスペースへクリップをかませながら、サスは鼻溜を振った。

滞ることなくその後も、計三つのクリップの束をスラーへ要求し、サスは接続を終

えた管制端末から体を抜き出す。打って変わって前へ回ると、この格納庫の位置を要求し画面を操作した。

応じて画面が表示を始める。

その裏側でバシリ、ショートするような音は鳴り響いていた。

同時だ。黒い箱は唸りだす。

管制端末のモニターには、入力通り近辺マップが展開されていた。マップは扉を開くぐればそこに第二霊安所があることを、そうしたスペースがここには二十箇所も用意されていることを教えている。さらにはそれら霊安所を管理する詰め所が、霊安所内奥、五つおきに設置されていることもまた、知らせていた。

恐らく『フエイオン』から引き上げられた遺体は、処置を施されたその後、この詰め所を通じて一般公開されているのだろう。

満足げに見下ろしサスは、黒い箱へ歩み寄った。

何の取っ掛かりもないようなその一角、窪むボタンをさらに奥へと押し込む。

ならホロスクリーンは一枚、目の前に立ち上がっていた。そこから二つ、仮想トラックボールが宙へ弾き出される。サスがそれを両手に取って、引き寄せた。ままだホロスクリーンを睨み付ける。

『トラ、すまんがデミはわしと一緒ににはゆかん。もうひとりの社員はお前さんがなつてくれ。ツナギはハッチの脇に掛けとる』

耳にしたトラがスラーと顔を見合わせた。その顔へスラーが、ワケもなくエラそうにアゴをしゃくつてみせる。船へとトラをうながした。見て取りうなずき返したトラは、たちまち霊柩船へ駆け出してゆく。

任せたサスの前でホロスクリーンは、今や前後二枚に乖離していた。データはそんな二枚の間へ三次元のブロックパズルよろしく、次から次へ落ちてきている。二つのトラックボールを扱いサスはそれらを回転させ、時には寄り、引きもしながらチェックを続けた。そのたびに落ちてきたデータから二次元のスクロールデータは展開されると、それをサスは脇へ添付する。また新たに落ちてきたデータの確認に取り掛かった。

『こいつあ、すげーな……』

思わず体も前のめりだ。スラーが、うなる。

続けるうちにも脇へ寄せられたスクロールデータは幾重にも重なって、落ちてくるデータをとり囲むほどまでに膨れ上がった。それらを睨んでサスは一度、大きなため息を吐き出す。造語ならぬ『デフ6』言葉で何事かを呟いたかと思えば、添付データ

の順序を入れ替え、抹消し、新たなデータをまた開きにかかった。

あいだも二枚のホロスクリーンの間へデータ降り続け、増殖、肥大してゆく。積み重なるまま岩のごとくサスの前に立ちはだかったなら、物音ひとつ立てていなかった黒い箱は、増してゆく負荷に振動とも取れる鈍い音を立て始めていた。

聞こえているのかどうなのか、それでもサスはわき目をふらない。オーケストラの指揮をとるがごとく絶え間なく両手を動かし、『デフ6』言葉を切れ切れに吐きながら、作業に没頭し続ける。

ついにどれほど画面をスクロールさせようとも引こうとも、岩石と化したデータ塊が二枚のスクリーン間に収まらなくなったなら、取り囲んで添付された二次元データも澱のごとくとたまりにたまって視界は埋め尽くされる。

『お、おい、サス。大丈夫か？』

見回しスラーが、眉を詰めた。

と、そんなスラーの足元でダウンしたブレードが、湯気を上げ黒い箱より飛び出す。上部でもひとつ、その真下でさらにまたひとつ、立て続けに排出された。

様子をサスが、ようやくチラリ、うかがい見る。

やおら周囲の添付データを、強引に片側へと寄せ集めた。

トラックボールをひねり、二枚だったスクリーンを再び一枚へ貼り合わせなおす。醜悪とも取れる巨大なデータ塊は、そんなスクリーンの間で押し潰されながら消えてゆく。見極めサスは、二つあったトラックボールの片方を、一枚に戻ったホロスクリンへ弾き飛ばす。残ったひとつで寄せ集めた添付データもまた放り込んだなら、次の瞬間、上へてんでバラばらだった添付データはつなぎなおされると展開されていた。クリックすればそのさらに上へ、窓は開く。滲んで見辛い場所もあったがそれは、この臨時収容船の平面マップで間違いなかった。

先を争い、平面マップが立体へ姿を変えてゆく。

部位ごとに、文字や色さえも書き込んでいった。

『すげえ、来たっ！』

だがただ一所だけだ。無記入、無彩色と残る。

それは同じ階層、いわばこの船のド真ん中にあつた。

と、マップの解像度がわずか劣化して滲む。

見て取りピクリ、眉を跳ね上げたサスが、握っていた最後のトラックボールを放りだした。その手で箱の下部、青い色を放つランプを叩きつける。すかさず黒い箱の下部から光学バーコードは吐き出され、すくい上げたたんバーコードプリンタを搭載

していたブレードもまた湯気を上げて黒い箱から飛び出していた。

『ほ、間におうたわい』

トラックボールごと、もうホロスクリーンはダウンしている。

『なんだソレ？』

ブレードはまた排出され、筐体へ押し込みなおしながらスラーは一仕事終えたサスの手元を、のぞき込んだ。

『コレはの……』

答えてサスは、ツナギの尻ポケットから電子地図を取り出してみせる。プリントされたばかりの光学バーコードを、そこへ挿入した。ならばばらくの間は空いて、手のひらサイズの電子地図へこの船のマップは投影される。

『どうだ？ うまくいったのか？』

そこへ、ツナギへ着替えたトラは駆け戻ってきていた。

ニヤリ笑ったサスはまったくもって不敵、極まりない。ただ電子地図をトラへ突き出し鼻溜を振る。

『まあ、見ての通りじゃ。おかげで一台、売りモンの大事なサーバーを、ダメにしてしまったがの』

トラが振り返ったそこで黒い箱は、溶ける寸前と煙を吐き続けていた。

残して格納庫を後にする。だからといってこの広さだ。探して全てを見回ることなど不可能だった。さしあたって手近にあるのは第一霊安所と、第五霊安所である。比べてどちらが閑散としているのか、確かめるべくスラーは軍服姿で船内を闊歩した。

お眼鏡にかなうのは、第一霊安所らしい。明らかに横たえられたボディバックの数が少なかった。伴い、出入りする業者や遺族の数もまばらときている。おかげで霊安所奥の詰め所作業も、激減している様子だ。だからして駐在する優勢二十三種中の『ホグス』種担当官は、光の消えたモニターが埋まるデスクへ覆いかぶさると、まさにこの船の中で船をこいでいる最中でもあった。

さて、いかに不条理な要求であれ、強引に相手にのませる方法があるとするれば、それは何か。いうなればそれは有無を言わず場の心理的主導権を握り、相手の上位に立つことだといえよう。そう、古式ゆかしき戦法、強襲だ。

遺体引取りにいそむ葬儀業者へはご苦労、と腕を振り、うなだれる遺族へはご愁傷様でしたと声をかけ、スラーは将校気分で詰め所へ向かう。そうして前に立ち、部屋奥、ウィルスカーテンに仕切られ伸びる通路の向こうへ目を凝らした。

さて、これから繰り広げるのは、そんなウィルスカーテンを潜り抜け、内部へ侵入するために欠かせないシヨードだ。

備えてスラーは仁王立ちとなる。

背中へ回した両手を固く組み、腹の底まで息を大きく吸い込んだ。この戦法の成否を賭け、最初一喝を『ホグス』へ放つ。

『くおわらあつ！ 何を、しとーるっ！』

叩き起こされた『ホグス』が、デスクから爆発的な勢いで跳ね起きていた。腰掛けにいた椅子は弾け飛び、形状記憶合金がごとく直立不動とスラーの前で伸び上がる。

『……った！ はいっ！ も、申し訳ありませんっ！ ソロ軍曹殿！』

などと、そもそもこの船にこうも旧式な上官が存在するのかどうかは謎である。だいつしか刷り込まれたステレオタイプほどイメージを誘導しやすいものはなく、何より目の前の『ホグス』がそれを証明してみせていた。寝起きとは思えぬほどの滑舌のよさで答え、くつていたヨダレを慌てて拭ってみせる。そうしてようやく目の前に立つ『エブランチル』が、ソロ軍曹ではないことに気づいてまじまじ、スラーを見つめた。

『あ、あの……』

どこのどなたか、と訪ねたいらしい。だが自ら走らせたシナリオが、すでに彼の立場を制約している。それ以上が許されるはずもなかった。見切つてスラーは口を開く。

『貴様のせいにかつ?』

この藪から棒がいいのだ。

得体の知れぬ責任を負わせにかかった。

『は?』

『ホグス』は目を瞬かせる。しかしながら制約により割り振られた役割こそ、サボタージュの発覚したダメ軍人であつたなら、ここでも違います、何のことでしょうか、などと『ホグス』に質問ができる道理こそない。

『も、申し訳ありません。以後、このようなことがないよう、気を引き締めて任務に当たります』

シナリオにのっとり吐けば役割は、なおさら『ホグス』に馴染んだ様子だ。

『ソロ軍曹から、F7のことは聞いておつたろう。だのになんという失態だ!』

つけこみスラーはたたみかける。聞いたばかりの『ソロ軍曹』と『F7』のを混ぜ込み、『ホグス』の反応をうかがつた。そのタイミングは絶妙だったらしい。ビンゴを示して特徴でもある皮膚の凹凸を、『ホグス』はキュツと引き締める。

『ですがそれは、管轄が違いますので……』

つまり『ホグス』は『F7』のことを知っていた。だというのに逃げを打つなら、追うが道理だ。スラーはいきり立つ。

『だから、なんという失態だと言っておるのだっ！』

怒りをぶちまけ、いまだスラーの中にも設定されていない『失態』を引き出させるべく次の段取りへ取りかかった。

さて『ホグス』は今、サボタージュが発覚したダメ軍人である。指摘されたとたん、あるはずの『失態』を自身の中に探し始める。やがてはつ、とのんだ息に全身を硬直させると、その顔をスラーへ跳ね上げた。

『格納庫で何か？』

『回収したヒトを移送して来た。向かいの格納庫に安置してある』

来た、とばかりに打って返すスラーにこそスキはない。

『いえ、待ってください。二七〇〇秒コンド前、ヒト、二体、F7専用格納庫から搬入済みとなっているハズです』

ひとつ、揺るぎない事実をそうして手に入れる。

『まだ他に？ 失礼ですが、その制服は一体どちらの……』

が、聞き返されていささかスラーは焦りを覚えた。とはいえそこでうわ滑れば、主導権は相手へ移る。取り繕うなどナンセンスだ。むしろスラーは『ホグス』が唯一、見せたスキへ逆転の足払いをかける。

『まだ他に、だどーっ！』

一喝した。

『それが貴様の仕事だろうがあっ！ 先に搬入されたのは一体だ！ 残りが届いた際はF7へ通す！ 専用格納庫は今、先の船のメンテナンス中で利用できんからして、急遽こちらへ回るよう変更の連絡はあっただろうが！ うたたねなどで見逃しおつて！ きさま、やる気はあるのかあっ！』

散漫としつつあつた成り行きを『うたたね』の、アタマまで一気に巻き戻しにかかった。

『もっ、申し訳ありませんでした！』

おかげで伸び上がった『ホグス』が、折れんばかりに頭を下げる。なら鉄は熱いうちに打て、だった。

『分かればボヤボヤするな、早く行け！ 葬儀社が棺を構えて待っている』

『はっ！ 任務にとりかかります！』

力のこもった敬礼が美しい。

だというのに代わりの常駐官を呼び出そうとするのだから、これまたマズかった。

『かまわん。一刻を争う』

スラーは遮り口を挟む。

『ここはわたしが預かろう』

怒鳴りつけていたところから一転。着せる恩で押しとどた。振り返った『ホグス』の顔はまったくもって、これほどまでに自身の身になってくれる上官はいるのか、といわんばかりだ。果てに、妙な一体感まで生まれたりもする。

『も、申し訳ありません！ それでは、よろしくお願いいたします』

『覚えておけ。つまらぬヘマさけしなければ、お前もいち軍人として故郷に錦を飾ることができるのでぞ』

だからこそ吹き込んでやる、さらなる使命感。

『みなのお喜び顔が見たいだろう？』

それは眠るほど退屈していた『ホグス』にとって、じいんと響く言葉となつてい。とたん瞳は輝き出し、腹からスラーへ答えて返す。

『はいっ！』

逃さずスラーは追い討ちをかけた。

『かまわず、行つてこい！』

それこそあの夕日に向かつて、と。

受けて再敬礼した『ホグス』が駆け出す。

そう、その実、降格へ向かつて。

見送りスラーは一つ、息を吐いた。謎の熱血上司を切り上げると、緩めた軍服の襟の中から、通信機のマイクを引きずり出す。

『そっちへ詰め所のホグスが向かったぞ。たたんで、早く来い。俺は今から入艦データーの抹消にかかる』

『了解』

答えて喉元のシワヘトラは通信機を押し込んだ。

『来おるのか？』

隣でサスが鼻溜を揺らす。

『サスは手を出すな。わしが片付ける』

『の、方がよさそうじゃの。頼んだ』

もう意地を張る歳でこそない。

そんなふたりの足元には、霊柩船から下ろされたチタン製の棺があつた。挟んでふたり、にこやかに立てば、小さすぎるサスのせいでトラの巨漢はやたらと際立つ。まさに『ホグス』を待ち構えた。

と、よほどスラーがうまくたきつけたのだろう。ややもすれば格納庫の勝手口は押し開けられる。投射されたウイルスカーテンを潜り抜け、軍服姿の『ホグス』は格納庫へ飛び込んできた。

『まことに遅くなりました。回収物をF7までお通しいたします』

なら放つ言葉は、それこそすぐにもばれるウソで十分だ。

『ご苦勞様です。まずは中の確認を』

トラが似合わぬ口調で繰り出し、ひたすらニコニコ笑つてサスもまた『ホグス』を促した。

『ご苦勞ですの』

答えることなく使命感に燃えて『ホグス』は、棺に空いた小さな窓を覗き込む。

『フエイオン』事故発生直後、遺体の引き上げがあつた際は報告が義務付けられてい

た『ヒト』はそこに、横たわっていた。

『確かに』

と、棺の中でその目は開く。死んでいるのだと思い込んでいただけに『ホグス』はぎよつ、と目を見開いた。思わず生き返った、といいかけたところで彼の記憶は途切れる。

『痛そうじゃのう……』

サスが目を細める。

窓を覗き込んで前屈みとなっていた『ホグス』の頭を、思い切りチタン製の棺へ叩きつけたのはトラだった。

『かまっておる時間はない』

その手を緩め、力の抜けきった『ホグス』の体を棺から引っ張り降ろす。

『いやはや、そうじゃった』

棺のふたを押し開ければ、中からアルトは身を起こした。

『実にいい音だった』

だが、声はライオンだ。『ホグス』の頭蓋骨が上げた悲鳴のことを言っているらしい。

『しばらくは目を覚まさん』

答えるトラに愛想はなかった。

『だろぅな』

ライオンがアルトのまま、棺を抜け出す。そうしてトラから『ホグス』の体を引き受けた。

『この始末はわたしがしておく。ご老体とトラは先を急げ』

預けたトラのシワが弾む。

『分かった』

葬儀社の偽造IDを、サスが格納庫の扉へかざした。読み取った扉は開き、ふたりは表へ繰り出す。

残されライオンは、空になった棺桶へ『ホグス』の体を放り込んでいた。中の酸素濃度をホグスに合わせ調節すると、惜しむことなく棺桶をロックする。

ならその光景は自然だった。

詰め所を訪ねる葬儀社社員が、二体。

入艦記録抹消の最中だったスラーは見つけて、駆けつけたトラとサスへ顔を上げる。

『よう、来たか。あのホグスは？』

『ライオンが棺桶へ放り込んでくれている。済んだなら、こっちのフォローへ来るハズだ』

手短にトラは告げた。

『守れる限りはここに居座るが、無理なら離れるぜ』

『かまわん。その時はデミを頼むぞ、スラー』

『悪いがそれは俺の役目じゃねーし、あんたも真剣には言つてねー』

サスは目を細め、軽く突っぱねたスラーはこうも付け加える。

『間違いなくF7つて場所は存在して、すでに二人は運ばれてやがる。ホグスからの情報だ。いるぜ、必ずな』

『そうか。ならば、ますますここで引き下がるわけには、いかんの』

サスが鼻溜を揺らし、隣のトラを見上げた。受けた視線にトラも振り返ると、サスへアゴを引いて返す。ふたりはそれを合図に、詰め所奥へ続くウィルスカーテンへ身を翻した。オレンジ色のそれをくぐり抜け、向こう側へ足を踏み出す。

見回してサスが、懐から電子地図を取り出した。

『さてと、ありふれた場所には用がない。あるのは、この中央の不明区域じゃ。じゃ

が、そこへ通じる道は、ここだけか』

指は早くも地図を拡大させている。しばし地図を右へ左へ行き来させ、やがて画面を固定した。

それは不明となっている区域へつながるドアを持ち、なおかつこのエリアとも通じている唯一のスペースだ。凝視しサスは、その呼び名をなぞる。

『特殊医療区、保安所か』

目指す方向へその顔を持ち上げていった。用のなくなった電子地図を、ツナギの尻ポケットへ押し込み進む。

『さあて、どうみても、わしらが主要二十三種に見えんことは確かじゃ』

『最初はともかく、遺体を引き取りに来て迷い込んだとトボけるぞ。なに、もうろくじじいの芝居なら、わしにまかせておけ』

『ならわしは、さしづめモデール路線でゆくか？』

サスが息巻いたなら、トラも負けじと吐いてみせた。

歩く通路は見通せる限り誰もいない。都合に合わせて作りつけたいきさつをうかがわせ、規則性も何もない分岐を左右に伸ばしている。壁面など、船の外観からでは想像も出来ぬほどケチ臭く、どうにも的是はずれの注意を促すホログラムメモが張り付き、

焼けたホロスクリーンを灯していた。どう見ても管理はずさんだ。サスのみならずトラさえ見とれていたところで、声はあらぬ方向から聞こてくる。

はっ、と我にかえったトラとサスに緊張は走っていた。

足は止まり、おのずふたりは辺りを見回す。

見つけたわき道へ急ぎ、身を隠した。

ややもすれば目の前を、『ホグス』と同じ軍服を着た『バナール』三体は通り過ぎてゆく。息を潜めるトラとサスに気づくことなく、靈安所へは向かわずまた別のわき道へと姿を消していった。

『聞こえとったか？』

見送りサスが、隠れていたそこから頭をのぞかせる。覆いかぶさりその後ろから、トラもまた身を乗り出した。

『またF7で発砲騒ぎがあったらしいとか、聞こえたぞ』

『うむ。アルト、かの……』

サスの鼻溜が渋く潰れてゆく。

『縁起でもない。そのジャンク屋はネオンの頭を吹き飛ばすとか、言っておったのだろう。たとえ相手が違っていても、発砲されては困る』

もういいだろう。ふたりして通路へ戻った。

左右を見回し、サスは誘う。

『次を右じゃ』

ふたりして三叉路を折れた。

とたん内装は百八十度、様子を変える。これまでが嘘のように通路は広くなると、床に壁に天井へと有機媒体のウォールペーパーは張り巡らされた場所に出る。異質なニオイはシャットアウトされ、はめ込まれたホロスクリーンも明るく灯ると、スクロールする情報も整理されていた。

管理の管轄が変わった。

思わずにはおれない。だからこそ通路へ踏み出す前、うがるサスの足は止まる。

『監視カメラでもあるのではないかの？』

『あつたところで広い船内、誰が全てを見張るといふんだ。駆けつけてくるまで、時間はあるぞ』

豪快にトラは一蹴してみせる。

『それもそうじゃな、ということにしておくかの』

納得するしかない。

『保安所というのは、まだ先か？』

トラが確認したのは、この先しばらく身を隠す分岐が見当たらないせいだ。

『かなりの。じゃが、いちかばちかの手もあるぞ』

鼻溜を振ってサスは、付け加える。

『いちかばちか？』

目を瞬かせるトラへ、頭上を指差した。なるほど天井には空調、配管、配電、通信中継基地等のマスキングタグが張り巡らされている。

『もぐりこむのか？』

察したトラが口をすぼめた。

『わしならば、問題ないと思うんじやが……』

煮え切らぬ様子のサスが見回すのは、なにはともあれトラの巨体だ。

『ええい、その目はなんだ。その目は。たとえ火の中、水の中。ネオンの元へ一刻でも早くたどり着けるといふのなら、尻込みなどせん』

サスはしばし、うーん、と唸る。

『なら、わしが最初に中の様子を見るとするか。よし、トラ、わしを持ち上げてくれ』
指示に任せろ、といわんばかり、トラは軽々サスを肩へ担ぎ上げる。上でサスはな

お立ち上がると、空調スペースの扉をシールしていたマスキングタグを剥ぎ取った。扉が、片側を固定して落ちるように開く。肩で交わし、持ち上げたアゴで中をのぞきこんだ。が、見極めるヒマもない。

『サス……、誰か来た……!』

足音だ。持ち上げるトラが声を殺す。

『なに?』

うめいたサスの決断はこうだった。

『そら、上へ隠れるぞ』

トラの頭を蹴りつける。空調スペースへ潜り込んだ。おっつけトラも開いた扉を見上げる。天井は無理だとしても、ジャンプでぶら下がる扉を掴んでみせた。が瞬間、トラの体重にメキメキ扉は鈍い音を立てる。聞きながらサスは、中から伸ばした手でトラの手を掴んだ。力の限りに引っ張り上げる。

『つて、わしでは、無理じゃあ……っ』

それでもどうか、トラの頭が天井にのぞく。力尽きて手を離し、サスは尻餅をついていた。そうして放り出されたトラの手は、開いた天井の縁を辛うじて掴む。もう片方の手もそこに添えられたなら、鼻息も荒く胴回りにちようどのスペースへ、トラ

は一気にその身を持ち上げた。引き込んだ足の下からやがて、近づき増した靴音は聞こえてくる。息を殺し、サスとトラは覗き込んだ。視界に一体の『エブランチル』は姿を現す。なにやら手元の端末で書類チェックを済ませているらしい。開いたままの空調スーパース入り口に気づくことなく、通り過ぎていった。

『踏み切つて、大正解じゃったの』

だがもぐりこんだその場所は、立ち上がるにもサスですら少し狭いほどだ。つまりトラには始終、四つんばいを要求する広さだった。

『まったく』

ぼやいてトラは、ぶら下がり、開いたままとなっている扉へ手を伸ばす。閉めようとして、ピクリとも動かないそれに眉をしかめた。

『ん？ おお？ んん？』

どうやら飛びついた時、トラの重さに歪んでしまったらしい。そこを力任せとトラは、引き寄せる。刹那、止め具は壊れてしつかり握っていなかったトラの手から、床へと落ちた。

鳴り響く甲高い金属音。

『マズい』

『こうしちゃ、おれんわい』

まさにあたふただ。逃げてふたりは先を急ぐ。

破壊されたクレツシエの部屋、そのドアを開くために少なくとも、五〇〇〇秒コンドの時間を費やしていた。リーダーを粉碎したダイラタンシーベレットは、流動弾独特の粘度でもってしてこびりつき、分隊員総出による復旧を強いている。

間中、クレツシエは仮想デスクへ張り付いたきりだ。確かにシャツフルがああなった以上、プロダクトロームの指揮権は全てクレツシエにゆだねられている。その忙しさは分隊長にも、分らないではなかった。しかしながら負傷者へ見向きもしない態度は、どうにも分隊長の目に余る。仮にもクレツシエの盾となり一体は命を落としているのだ。シャツフルの乱心も分かるような気がして舌打った。

と、ドアがにじり、開かれてゆく。

あいたわずかな隙間から、やおら白衣は身を擦りつけながらもぐりこんできた。負傷者救助に駆けつけたのか。思えば分隊長は礼を述べかける。だがその体は分隊長の前を通り過ぎてゆくと、一直線にクレツシエの埋まる仮想デスクへ向かっていった。

『不躰な入室を失礼いたします』

だからして白衣こと、トパルはクレツシエへまくし立てる。

『取り急ぎ、進行状況の報告を』

もちろんここへ足を運んだ以上、それは通信で済むような内容ではない。だからしてなおのこと、順序を間違えまいとトパルは焦っていた。

『極Yの塩基付加は予定通り処置が終了。現在処置室にて経過を観察中。遅くとも七八〇〇〇秒コンドまでには結果が現れる予定です。また……』

と、そこでクレツシエの顔は持ち上がる。

『あなたは確かトパル・ジツク、35クルーでしたね』

確かめトパルの話を遮った。

『は、はい。そうです』

トパルは息をのみ、焦る気持ちを抑えて答える。

『結構。あなたの動揺はよく分かりました。結論から申し上げます』

それが『エブランチル』なのだ、ということは分かっている。だが必ずこちらの話を最後まで聞き入れてくれるシャツフルとの違いが、トパルを戸惑わせてならなかった。

『あなたが探しに來たシャツフル中尉は、五七〇〇セコンド前をもつてしてF7ラボ
専属軍医の任務を解かれました』

あまりに唐突な辞令が、さらに戸惑いへ輪をかける。

『近く本国へ帰還、新たな赴任先へ向かうことが決定しています。ラボへは戻りませ
ん』

にもかかわらず、クレツシエは驚くトパルの方がどうかしているといわんばかりだ。
淡々と話して投げかける。

『他に、質問は？』

しかしながら質問を受け付ける気こそ、ないらしい。待つ時間すら惜しんで休めて
いた手元を再開させていた。

仮想デスクの上で止まっていた二重螺旋がまた、ゆつくりと回転を始める。

背後では分隊員たちが負傷者の介抱していた。まるきり動かなくなった一体が外へ
と担ぎ出されてゆく。

たがトパルには、問うべきモノだけが黒い穴をのぞいたように、まるきり見えてこ
なかった。ひたすら頭が、着込んだ白衣同様、真っ白に塗りつぶされてゆくの覚え
る。

クレツシエがちらり、そんなトパルを盗み見ていた。

『なければ……いえ、質問できないようであるならば、ただちに仕事へ戻りなさい。まだ中尉の後任は決まっておりますが、それまでわたしがラボの指揮をとります。状況報告は以後、通信で結構。わたしの手をわずらわせないように配慮いただきましよう』

『申し訳……、ありませんでした』

言葉は、それ以外に浮かばない。埋めて脳裏をちらつくのは何ゆえにか、『カウンスラー』の音窟内で目の当たりとした旧『F7』ラボ従事者の姿だった。

囲う極Yを肩で振り払い、唐突にトパルを呼びとめ、シャツフルへと反抗的な目を向けたあの姿が蘇る。そして彼なら今ここで、クレツシエに質問することができたろうか、と考えた。根拠もなく、彼ならやってのけそうだとトパルは感じ取る。

シャツフルが吐きつけた通りなのだ。何か、どこかが違っていた。だがその違いが何であるのか、トパルには分からない。分からないことが、もどかしさを募らせた。そのもどかしさは何か大事なものが己には不足している、とやおらトパルを責め始める。

何が、と探ったところで、すぐにも見つけ出せそうな気配はない。

質問などと、諦めるほかなかった。

トパルは仮想デスクへ背を向ける。

同様に分隊員たちもまた後始末をつけると、この部屋からの撤収にとりかかっているとこだった。トパルは分隊長が追跡の準備がどうの、と張り上げる声を途切れ途切れに聞く。混じり、自律稼動を始めたドアをくぐり抜けた。

『待ちなさい！』

その背を、唐突なまでにクレツシエに、呼び止められる。何事かとトパルは振り返っていた。クレツシエはちようと、仮想デスクから立ち上がってみせる。

『たった今、イルサリの自閉が解けたと報告が入りました。あなたはただちにリンクルームへ、アルトの矯正が可能かどうか最終チェックを。結果を報告。可能ならば即座に作業へ取り掛かります。準備をなさい』

質問できないのだから、聞き入れるしかない。トパルは再びその頭を、クレツシエの前に深く下げていった。

『イルサリが自閉を解いた。これからリンクルームでチェックを行う。チェック後、可能ならば即アルトの再矯正にかかる。至急、中断していたアルト複製塩基との照合解析を再開。準備にかかれ』

上げた頭で部屋を出る。防磁ドアを据え置いたイルサリへのリンクルームは、クレツシエの部屋を回り込んだ向こう、Y字通路片側の奥にあった。向かって足を進めながら、トパルは片耳へ掛けたままのマイク越しにプロダクトルームへ指示を飛ばす。

『もう一点。極Y塩基付加の進行具合はどうなっている？』

『今のところ順調です。代謝スピードも安定。体温の上昇は現在も続いています、これは代謝安定とのタイムラグで頭打ちになることが予想されます』

確認すれば、返事は淀むことなく返されていた。

『了解。落ち着いたところで手の空いた者を順次、アルトの矯正へ移行させろ』

『了解』

軽く引いてマイクを巻き上げる。

現れたY字を右へ折れた。

すぐにも目に入ってくる通路、突き当りを睨む。

とそこに取り付けられた防磁気ドアが、通路側へ浮き上がった。開いたそこを潜り抜けて、やおら彼は姿を現す。疑うまでもない。彼がイルサリの自閉を解いたの。トパルは確信していた。

そんな彼と自然、目は合う。そうして与えたはずの白衣が早くもなくなっているこ

とに、嘔然としていた。

感度はかなり低いものだったが、あれはあれで最低限のウイルス濃度と菌種を感知できるシロモノである。それは自らの汚染度合いを把握するためであり、有機体の生成過程においては、清潔を保つため欠かせないものでもあった。

着用はクレツシエの神経質さに比例して徹底されている。ラボ内では、とりわけトバルたちのような職員の間では、手放すなど考えられぬ行為だった。ゆえに脱ぎ去った彼の様子は、いまだ続く反抗そのものとトバルの目に映る。犯しているミスを気に留めぬ毅然としたその態度もまた、注意を払い、神経を使い続けてきた己へのあてつけか、と癪に障りさえしていた。

すぐさま正したい衝動が、トバルを襲う。

自ずと両眼に力が入っていた。

どちらが間違っているのか、いや、自らの正当性を維持するためにも、だ。今すぐ正して思い知らせたい思いがトバルの中を駆け巡る。

だがそうして騒ぎ立てれば騒ぎ立てるほど、だった。それは消しようになくトバルの前へ浮かび上がってくる。見据えた彼とそれは、やがて引き剥がしようになく重なっていった。

もう、隠すことなどできはしない。つまるところ浮かび上がってきたそれとは、嫉妬だ。タブーを打ち破つてなお平然としている彼に、だからして彼なら質問できただろうと想像してしまったことに、トパルは己が強く嫉妬していることを意識する。

『お疲れ様というべきでしょうか？』

辿り着き言っていた。

トパルを中へ通すためか防磁気ドアは閉め切られておらず、後ろ手に支えて彼はそこで複雑な表情を向けている。

『クレッシェが言うように理解するなら、俺は俺の仕事をしたまだけだ。いたわられるような事は何ひとつやっちゃあいないよ』

答えずトパルは、彼の支える防磁気ドアへ手をかけた。押し込み、ひと思いに閉める。入るのではなかったのか。彼の面持ちは不可思議そうだった。

『中に影響が出ます』

向けてトパルは言い放つ。

『あの騒動のせいで、イルサリの取り扱いもややこしくなったもんだ』

失礼、いわんばかりに彼が小首をかしげてみせていた。先を急いできびすを返しかける。

『あなたはあの時、わたしの名を呼びました』

その背をトパルは押し止めていた。

声に振り返った彼は、何の話なのかすぐに飲み込めなかったらしい。しばし眉を寄せ、それからようやく口は開かれていた。

『トパルと……、34クルーと見間違えたただけだ。気に障ったなら、謝る』

言い淀んで改めた彼は、何をや気を遣っているらしい。

『それは一世代前のわたしでした』

返して耳にした舌打ちは、彼のものだ。

『シャツフルじやあるまいし、そうやすやすと言うなよ』

これでは気に障っているのがどちらの方だか分からない。しかしながらかまわずトパルは続ける。

『覚えていますか？ 何が違うと、尋ねられた軍医の言葉を』

話を持ち出した。

『ここであんたも、俺を殴る気だつて？』

少しばかり挑発的な口調で彼は茶化す。だがその誘いに、乗ったりなどするはずがないかった。

『何が、違う……と、あなたは考えます？』

トバルはただ問い返す。にもかかわらずそれは彼にとってどうでもいい話らしい。

『何も変らないさ』

軽くあしらっただけだった。

だからといって逃がすつもりこそ、ない。

『軍医は先ほどのプロジェクトから、ラボからはずされました。その際、発砲騒ぎが起こった様子です』

『シャツフルが？』

さすがにこの話は彼であつても驚くものだったらしい。聞き返して矢継ぎばやに、トバルへ問い返しもする。

『で、どうなった？』

聞いたトバルは奥歯を噛み締めていた。それこそが、投げかけることの出来なかつた自らの質問だ。慕っていたはずの軍医の顛末。それをいとも容易く聞き返してきた彼に、なおさら嫉妬心は湧き起こつて来る。

『違いなどない』

気づけば口走っていた。

いや、根本から違うのさ。

聞こえたような気がして、口調は自ずと強くなっていた。

『わたしたちは有事の際、殲滅を防ぐため多少の揺らぎをもつて生成されたとしても、原型をラボが管理する、同じ塩基から派生した有機体だ。時間さえあれば、そんな質問などわたしにもできた』

食らった彼は、きよんとしている。やがて察したらしい。その目を訝しげと細めていった。

『クレツシエにシャツフルのことを聞かされてすぐ、ここへ来るよう指示されたのか？』

問われてトパルは目を逸らす。

『わたしにとって軍医は最も信頼した上官だった。気にならないはずがない。だからこそ確かめなければならなかったのに、どうすればそれが出来るのか、あの時、わたしには分からなかった。時間さえあれば……、時間さえあればわたしにもできたはずだ。あなたに出来て、わたしに出来ないハズがないんだ』

繰り返したのはおそらく、自らへ言い聞かせるためだろう。だからこそ見かねたか、彼はそのときこうつづる。

『違いがあるとするなら……』

ついぞトパルは、勢いよく顔を跳ね上げていた。振り返った彼を見る目が、傷にでも触れられたかのように縮んで吊り上がっているのが自分にも分かる。前にしたところで彼が怯むことはなかった。話して聞かせる口調は、それまでと変わらない。

『……あんたはかつての俺がそうだったように、まだ自分の言葉を持つてないだけさ。ただ今の俺には、俺だけの感覚つ、てやつが確かにあるんだ。土くれからでもなんでもいい。生まれてここへ切り離された、これが俺だと言う、そんな感覚がな』

『自分の言葉？ 生まれてきた、感覚？ それは単なるあなたの曖昧な主観だ。それが違いだど？』

『思うだろ？ だが、否定できないほどちゃんとあるんだ。その得体の知れない混沌としたものが、ここにな』

指先で、彼が突いてみせたのは自らの胸だ。

『だから誰にもさらわれない、俺のだけルールで動ける』

そして小さくトパルへ微笑んでみせた。

『曖昧だと切り捨ててあんたにや、俺のマネはできないよ』

それは論すようであり、自らに満足したような笑みでもあった。

それこそが、わたしにはない。

過れば跳ねのけたい衝動が、またもやトパールを突き動かす。

『理解できないものに価値などない』

『そいつは、クレツシエに毒され過ぎだぜ』

『なら、あの事件に加担したわたしも、34クルーのわたしもそうだったのか？』

確かめれば、それまで続いていた会話にしばらくの間は空いた。

『ラボでアルトの……』

言いかけて彼は、言葉を切る。思い出した何かを辿るように、再びトパールの前へ連ねていった。

『俺が一番そばにいただけで、ラボでアルトの矯正過程に加わった有機体は少なくとも、その片鱗を埋め込まれていたのかもしれないな』

いつしかトパールは、肩で浅い呼吸を繰り返している自分に気づく。そんなはずはない。落ち着け。ただ己へ言い聞かせていた。

『外に出る』

眩きは、今こそ必要なものだと思えない。

『外？』

このプロジェクトを完成させ、潤滑に動く等しき世界の外へ出る。リスクを負う支配者の世界に住まう者となる。『カウンスラー』でシャツフルと交わした言葉は、鮮烈な驚きと共にトパルの中に残されていた。そして今、彼への嫉妬心を抑えるにはそうするほか術がないように思えてならなかった。

『そこへ出たなら違いなどと、すぐにも勘違いであることは明らかとなる』
吐きつけ防磁気ドアへと手を伸ばす。

引き開け、一氣に中へ足を踏み入れた。

監視していた白衣らはそこで、ようやく現れたトパルへ振り返っていた。

ほどなく離れた位置で、あれほど清潔感溢れていた部屋へと鉛臭さは充満してゆく。抜いていたプラグを、再びスパークショットへ差しこんだせいだ。

（やっぱ、このニオイですよ。ボス！ 血が騒ぐー！）

最後、ミールパックをたிரらげた一体が、腰掛けたフレキシブルソファの上で腕を振っていた。

（どないや、バッテリーの残量は？）

取引を中止する。そう決めたテンの動話には、いつもの力強さが戻っている。

（ダメですね。無放電時間が長かったことと、プラグを外していたせいでしょう。ほとんど残っていません）

答えるメジャーが手元のゲージをのぞきこんで眉間を詰めた。

（具体的にどれくらいや？）

テンが振れば、メジャーはゲージからそんな顔を持ち上げる。

（フルで一二〇百二十セコンド）

短くつづる隣でもう一体もまた、指を折っていた。

（九五）

（こっちは、一四五セコンドや）

テンも知らせて最後に振る。その手でピシヤリ、右股を打ちつけた。

（しゃあない）

搾り出す。

（ええか、残り放電時間五〇セコンドや。切ったらお互い、知らせろ）

メジャーともう一体へ交互に視線を走らせた。双方が神妙な面持ちでテンへうなずき返し、見届けテンは、打って変わって明快と腕を振ってつづる。

（それからどや、クロマに連絡つきそうか？）

その動話にメジャーの隣から弾かれたかのごとく、一体は立ち上がってみせた。腰掛けていたフレキシブルソファを回り込むことなく、またいで後ろへ飛び降り、床へ屈み込む。そこには手のひらほどの大きさのビーコンが、動作中を示して黄色いランプを点滅させていた。

限られたスペースの関係上一式を取り揃えるわけにはゆかないが、個々の好みやグループ行動時のバランス等を配慮し、船賊たちは自分のガスマスクの中に翻訳器やビーコン、非常食に解錠ツール、予備バッテリーや救急箱であるところのファーストエイドセット等のいずれかを、誰もが忍ばせていた。もちろんテンがこの一体を連れてF7へ乗り込んだのは、彼がビーコンを仕込んでいる、と知っていたからである。

（作動中です。ただ通信機とはちやうんで、問題はこいつの信号をクロマが気づいてくれるかどうか、ちちゅうとところですけれど）

旧式の地雷にも似た楕円のそれをつまみ上げて一体は、動作を確認するようにひとつふたつ、裏面のパネルをいじってみせた。そこへテンは動話をかぶせる。

（大丈夫や。あいつやつたら見逃すはずがあらへん）

（だからクロマを船へ戻したんですよね）

つけ加えてメジャーもまたテンへと微笑みかけた。様子はいかにも楽しげで、テンもまた思わず小さく笑い返す。引き締め、肩ハスパークショットを担ぎ上げた。

（ほな、いくぞ）

フレキシブルソファから立ち上がる。

（はい）

同じくメジャーもソファから尻を抜いた。

ビーコンをいじっていた一体も手早くそれをガスマスクの中へ仕舞い込んで、ヒザを伸ばす。

そうして互いが目配せを交わした時間は、至極短い。うなずきドアへきびすを返せば、ノブ側の壁へ、スパークショットを下二本の腕で構え、テンが背をつけた。挟んだ向かい側へはもう一体が身を添わせ、残るメジャーがスパークショットの電極をノブへ押し当て構える。

残り少ない電力は無駄にできない。手元で放電量を必要最小限に絞と、引き金を引いた。二つに割れた電極から、やおら光は短くほとぼしり、鈍い音と共にノブへ絡む。それまで充滿していた鉛臭さに、ノブの焼け焦げるニオイは重なると、遅れて湯気にも似た煙は白くうつすらテンたちの前に立ち上った。

見定め、背後につくよう、テンはメジャーへ手招きする。同時に挟んで向かいのもう一体へタイミングを伝えるべく、宙で指を折った。

(一……二……三……)

途切れたところで静かに、実に静かに、テンはスパークショットの電極で、ドアを押し開けてゆく。

そうして開いた扉を潜り抜けた分隊長は、他の分隊員らと共に保安所へ向かった。『お前は怪我した者を医務室へ連れて行ってやれ。そつちは残念だが、そのまま霊安室だ。処置を頼む。もちろん家族への連絡はしてもかまわんが、引き取りはこの捕り物が終わってからにしろ。うまく取り計らえ』

負傷者を抱えた分、歩調の鈍る分隊員らを追い抜き、指示を飛ばして回る。先頭まで一気に躍り出たなら、振り上げた手で声を張った。

『残りはシャッフル中尉の追跡に向かう！ あのだではそうも移動はできませんだ。警戒線をエリア四五まで展開。搜索範囲を囲え』

手近な一体を呼び止め投げる。

『同時に中尉のIDアクセス痕跡を追跡。逃走経路の割り出しにつとめろ』

また別の一体へ指示した。

『ブリーフィングは保安所内にて！ それまで各自、装備の再点検をしておけ！』

身内を狩るなど気乗りはしなかったが、今しがたの大立ち回りだ。警戒する越したことはない、まさに、その歩みをさらに早める。プロダクトルーム前をラボ隔壁側へ急いだ。間際で現れた十字路を右手へ折れる。遮るウィルスカーテンは一枚きりだった。その向こうに立ちふさがる保安所の、ブルーグレードアへとなだれ込んでゆく。

『うおっと』

声はサスのものだ。同時にその足も止まっていた。なら背後で四つんばいになっていたトラの、うんざりした表情に輪はかかる。

『なんだ、また行き止まりか？』

何しろ身を反転させるスキさえないこの空間で、トラはすでに何度も後退を余儀なくされている。ネオン救出の使命に燃えたトラと言えども、さすがにグチをこぼさず

にはおれないそれは、億劫さだった。

『まあ、それはそうなんじゃが』

などと、サスの返事ははつきりしない。

『ええい、どうした？』

その尻ばかりを眺めていたトラは、首を伸ばす。と、そこに緑の光線は、格子よろしく行く手を塞いで張り巡らされていた。

『警戒線か？』

言えばサスがうなずき返す。

『危ないところやった。今しがた目の前に出てきおったわい』

『侵入がバレたか？』

『まさかの。わしらが潜り込んだとバレたなら、侵入経路も筒抜けじゃろ。追跡なんぞ容易いもんじゃ。囲わんでも追いつくわ。これはもうちつと別の、何かを警戒してるんではなからうかの？』

鼻溜を振ってピントの合わない老眼の目を細めてみせる。サスは光線に触れぬよう、注意深く照射装置の根元を覗き込んでいった。任せてトラは、シワの間から通信機を引っ張り出す。つなげたのは、霊安所の詰め所を陣取るスラーの元だった。

『聞こえるか？』

『聞きたくない声だが、聞こえちまってらー』

用意していたかのような応答は、悪態だろうと小気味よい。

『で、どうした？』

『急に警戒線が張られた。そっちの様子はどうなっておる？』

『……いや、こっちは相変わらず湿っぽい空気が流れてるだけだぜ。俺がここで入艦記録をいじっていることも察知されてないくらいだ。何かあればすぐに知らせてやるから安心しろ。いきまいていた割には気が小さいぞ、テラタン』

などとスラーは毎回、一言多い。

『うるさいわい』

同時に切った通信機を、トラはシワの間へ押し込みなおす。

『いかんの』

サスが呟いていた。

『は、あのエブランチルが悪いのだ』

吐き捨てたトラへ違う、とサスはこう続ける。

『その話ではないわい。これは警報が鳴るところか、触れば焦げるやもしれんシロモ

ノじゃ』

照射装置から顔を引き戻した。身を反転させる。

『そら、そら、ぼうつとしとらんと後退じゃ』

向かい合ったトラを追い払った。

『ええい、また後戻りか』

唸りトラは、器用に体をくねらせる。とたん悲鳴は小さく上がっていた。

『うお、体がつかえた』

瞬間、沈黙が流れたのは錯覚でもなんでもないだろう。

『ええい、手の掛かる！』

サスの小さな体が、とたんトラへ体当たりを食らわせる。

いつしか眠りこんでいた。

経て、ネオンは記憶に残るおぼろげな眠りの淵から、蘇る。

五感の隅々に充填されてゆく意識はまるで、今しがたこの世へ生み出されたばかりかのごとく新鮮だった。実に冴えわたったそれは、目覚めだ。

満ちる光を受け入れた目の、焦点が合うまでのタイムラグ。

掴んで引き寄せたシーツのシワさえ遠近感伴い、やがて世界はネオンの瞳へ映り込む。しかしながらあの時のように、それを白衣と混同しなかったのは、混乱そのものが「していた」という過去にまとめあげられたせいだろう。仮死や矯正で寸断されていたかつてと違い、眠つてもなお積み重ねられる記憶がネオンへ整合性を与えていた。その整合性が、帰る場所を探して混乱していたネオンの足元へ、道を一本、伸ばす。連なるそれをなぞれば、ネオンの目は彼方をとらえていた。

とたん、寸断されたせいで滞っていたナニカは溢れんばかり流れだす。巡ってそれは血を血に変え、肉を肉たらしめると、その全てを鼓舞して巡るスピードさえ早めようとしていた。

いてもたってもいられない。

そう、紛れもないリズムは生命として、ネオンの中より響きだす。

そのリズムは鼓動と絡み、今、ここに、誰のものでもないネオンの意志と意識を紡ぎ出していった。

ままに伸びる道の向こうへネオンを、そつと導き押し出しさえする。
気づけばベッドから足を引き抜いていた。

床へ下ろす。

そこに靴はなかった。

だが裸足もなかなか気持ちがいいものだ。

むしろ踏みしめた足裏からつながるこの躯体、全てこそが、自分なのだと実感できる。それは『アズウェル』で生きている今を奏でる、と意識したよりはるかに明確で、いかに思えるだけを失っていたのかをネオンへ知らしめた。

ならふと眠る前、アルトが話していた故郷という概念、無条件に埋め込まれた最初のナシヨナリズムを思い出す。案外、このことなのではないのだろうか。ネオンは想像して、確かめるように大きく息を吸い込んだ。

満たされて、あると主張を始める、譲れない領域。

譲れば己を明け渡すに等しいモノの気配。

間違いない。

思えたからこそ失ったその先を想像して、得たばかりの身をネオンは震わせる。

ならもう、好きになんてさせられはしなかった。

肩にかけられていただけの白衣が、脱げ落ちかけている。引き寄せネオンは袖を通した。大きすぎるせいで袖口が指先までを覆ったなら、手早く左右、まくり上げる。

中で体が泳ぐほどの前を合わせて部屋の中を、ぐるりその目で見回していった。

「何とか出なきや」

ドアへ歩み寄る。

反応して開くのを待った。だが案の定、外から施錠されているらしい。ノブすら見当たらないドアはピクリとも動かない。

諦めネオンは身をひるがえした。そもそも、ここがどこかも分かっていない。他に出口はないのか。探して注意深く、視線を這わせてゆく。

と、それは記憶の残滓だ。そうして眺めた部屋はやおら、よく知る在りし日の光景をダブらせる。あ、と開いた口が閉まらなくなっていた。使い勝手を心得た、ここはセフポドの研究室で間違いないと思う。示して真正面、正方形の壁面一部を切り取りそれは変わらずせり出してもいた。

「イルサリ……」

駆け寄りネオンは、筐体へ手のひらをあてがう。ならセフポドの物理デスクに作業用として灯された仮想デスクは傍らに蘇り、イルサリより吐き出された足の踏み場も

ないほどのケーブルに、つながれた矯正ポッドが、離れたところで揺らめく四本の腕のホログラムが、昨日のことと辺りを取り囲んでいた。続けさま、生々しくも目覚めと同時に問診を繰り返すイルサリの合成音声までもが、頭の中で聞こえ始める。

嫌って逃げ込んだあの防音室は、とネオンはアゴを弾き上げていた。とらえた部屋の一角にあるはずの、のぞき窓が着いたドアを探す。そこには今、取ってつけたようにロッカーが立てかけられていた。

いてもたってもおれない。駆け寄りネオンはロッカーをまさぐった。未使用のロッカーは、中に何も入っていないらしい。揺すればすぐにも動く軽さだった。抱えてにじるように、ネオンはロッカーを移動させる。ドアは、その奥から姿を現していた。

これだ。思うからこそつま先立って窓から中をのぞきこむ。だが張り付けられたスモーク用のチップが邪魔でよく見えない。もどかしくなり、埃のうつすら貼りついたドアの隙間へ指を押し込んだ。力の限り、引いてみる。びくともしないなら指を掛けないおし、もう一度、踏ん張った。

施錠されていなかったドアはついにその時、にじり、動き出す。

息を切らせたネオンの目の前で、開き切った。

背中越し、射抜くような光が中へ投げ入れられる。長らく閉じられていたせいだろ

う。カビた臭いがネオンの鼻をついた。思わず口元を覆ってネオンは目を細め、見えたものに細めたばかりのそれを見開く。

まるで待ち構えていたかのようにでない。記憶の中にしか存在していなかった品の全てが、埃にまみれてそこにあつた。ホログラムの台座に、束ねられたままのコード。セフポドの操作端末デスクに、付属ラック。磨り減った椅子もまた虚無を抱えて傾き、こちらを向いている。見当たらないのはギルドに発見された自身のポッドくらいで、その全てには懐かしさと忌まわしさが、嫌というほど絡みついていていた。絡むその手でネオンもまたそのうちのひとつなのだ、と手招きさえる。

呼ばれるままに歩み寄っていた。

言葉はだからこそその事実もまた、ネオンへ蘇らせる。

あたしがいると、みんなに悪い。

得たばかりのモノのそれが、正体でもあつた。

足を止めれば目の前で、不安定だった椅子がガタリ、音を立てて浮いていた足を床につける。その拍子にひじ掛けが、もたれ合うデスクのどこかを押し込んだ様子だ。埃にまみれたデスクが、なけなしの電力を吐き出し稼働を始める。今にも消え入りそうな具合でそこに、小さなホロスクリーンを立ち上がらせた。目こをらせば中に、荒

い画像の動画は流れ始める。

「……なに？」

当時の研究室だ。ネオンは目を見張っていた。揺れるトニツクのホテルのホログラムが片側に映り込んでいる。かと思えば、かすかに発砲音はした。画面の前を白い物が何度も行き来し、やがてこちらを覗き込むようなアルトの顔が、セフポドの顔が、画面いっぱいに映り込む。

『願わくば当初の目的通りアルトが、イルサリ症候群にさらされた者の、手助けとなることを。全ての者を、個のままにつなぐ要となることを』

矢継ぎ早とまくし立てるその息は、荒い。常に背後を気にする視線もまた、落ち着きがなく異様だった。

『動力が落とされた。次クルーのセフポドがこれを見つけたなら、それが目的であったことを忘れぬよう、ここにメモしておく』

とたん怒号は飛び込んできた。

容赦のなさに、ネオンは息をのむ。

弾かれセフポドもまた、画面の中で振り返っていた。その白衣に画面は塞がれ、続く物音に何が起きたのかは分からない。ただそこでプツリ、動画は切れていた。

光が落ちる。デスクの電力も、それを最後に尽きた様子だった。

この動画こそ、この場所で最後に起きた出来事に違いないと、ネオンは唇をかみしめる。そして垣間見た様子から、きつと多くの怪我人が、悪くすれば死者が出たことを想像せずにはおれなくなっていた。

たとえ電力が残っていたとしても、もう二度と見る気にはなれそうもない。

ネオンは嚙んでいた唇を解く。

いつからから止まっていた息をゆるゆる、吐き出していった。

果てにこうしてある自分の手足を今一度、眺めなおす。

回り出した己がリズムへ恐る恐る、耳を澄ませた。

命が、不条理で呼吸している。

こみ上げてくる思いは、感謝や懺悔などではなかった。

ただ頭上を仰ぐ。

努力せずとも降り、聞こえてくるリズムに思いを馳せた。

それこそ課せられ、果たさねばならぬ使命なのだと感じ取る。

でなければ一体、誰に何が残るのか。

とその目に、それまで気づけなかったものはぼうつ、と浮かび上がっていた。長ら

く放置されることではかぶっていた埃だと思い込んでいたが、違つたらしい。点々とこびりついていたそれは全て、鉛を含んだダイラタンシーベレットの弾痕だ。四方は取り囲まれていた。

そして靈安所の片隅は、うつてつけのスペースと迫り着いたシャツフルを迎え入れる。遺体引き取りの際、そこには支給されるボディバックの予備がうず高く積み上げられたストックテントだった。

かき分け奥へ紛れ込み、シャツフルはごわつくそれをベッド代わりと、まずは糖輸液の点滴に取りかかる。次に、完全に解凍した代謝促進剤の投与を試みた。

代謝スピードは早ければ早いほどコントロールは微妙を極めるが、慎重になるがあまりのん気に横たわっているヒマこそない。代謝速度は通常の三十倍。代謝期間を一八〇〇秒コンドに設定し体内へ落とす。

すぐにも上昇をはじめた体温が、熱に浮かされたような息苦しさをシャツフルへ与えていた。噴出す汗に額を拭えば、尋常ならざる代謝速度のせいで早くも浮き上がった古い角質がよれ、見つめる手のひらから剥がれてゆく。裏返せば、ひび割れた皮膚

の下から新たな皮膚がシャツフルを覆って張りなおされ、従い麻酔を投与されたかのように被弾箇所は、痛みの範囲と深さを小さく浅く変えていった。その何とも言い難い感覚に、青白い顔をさらに青白く縮み上げてシャツフルは、肩で荒い呼吸を繰り返す。

場所のせい、フェルマータ葬儀社と名乗ってもぐりこんだ何者かのことが脳裏をよぎっていた。彼らが『F7』を目標しているのだとすれば唯一、双方を行き来することの出来る分隊員たちの保安所を突破するしか方法はないはずだと、その目を細める。

かつてラボから脱出したセフポドらも、シャツフル自身が唯一の専用格納庫を掌握したことで、アルトのポッドを盾に相当数被弾しながらその芸当をやつてのけている。それこそ興奮剤でも投与していなければ不可能な荒技で、醒めた後のことを考えたならぞつとするやり方でもあった。

だが果たして今潜りこんでいるやからに、それほど覚悟と度量が備わっているものなのか。シャツフルはうがる。いや、恐らく無理だろう、と考えた。

そろそろ代謝促進剤投与から一六〇〇秒コンド。

糖輸液はもう落ち切っている。

バイオゲージを弾いて剥離剤を湿布し、シャツフルはその腕から針を抜き去った。促進剤を傍らにゆつくりと立ち上がってみる。

思った以上、代謝に伴う体力の消耗は激しい様子だった。体は病み上がりよろしく重く、だが動きを遮る痛みこそもうどこにも感じられない。

両足で交互にボディバックを踏みつけてみた。

軽く膝を曲げ伸ばし、股も上げてみる。

問題はない。

最後、いつものクセで顔を拭いた。熱っぽさも引きつつあるらしい。汗の引いたその手に白い粉が吹いているのを目にする。叩けば全身から埃のように、剥がれ落ちた皮膚が辺りへ舞い上がった。

クレツシェの思うとおりには、させない。

過る思いを復讐か、と自ら吐き捨ててみる。だがあまりにも容易く奪われたのは地位でも名誉でもなくプライドであり、このラボへ尽くしてきた自らの尊厳であればこそ、理屈ではないモノが黙っておれぬとシャツフルを突き動かしていた。

ままに残りわずかとなった促進剤を抜針する。

ボディバックをかき分けた。

思いだけを胸にゆつくりと、しかしながら確かな足取りで、シャツフルはストックテントから抜け出してゆく。

『今後のためにも、明日からダイエットだな』

空調スペースでいやと言うほどもりうつたトラが、吐く。その隣には、深くうなづくサスがいた。

『よく言った』

そんなふたりがどうにかこうにか降り立った場所こそ、目指す保安所を目と鼻の先に控えた通路、その脇道だった。身を隠すふたりの緊張はもう高まるほかなく、角からトラはシワを、もといその奥に窪んだ瞳をのぞかせる。

『この先か？』

なら足元から同様に、サスもまた半身を乗り出し鼻溜を振った。

『そうじゃ。あの突き当りのＴ字路を、右へ折れた先にあるとなつとる』
確かめ終えたトラが顔をひっこめる。

『だが保安所などと警備のかなめであろう。どうやれば突破できる？』

まさか遺体を引き取りに来て迷った、などとはもう通じそうもない。

『そんなもの……』

おかげで珍しくサスも言葉を詰まらせた。

『気合じや、気合！』

これでも『デフ6』齡、百五十四歳。ちなみに平均寿命は百七十歳だが、それでいて言い切る意気込みだけは、あつぱれた。しかし称えたところで現状、何の役にも立ちしなかった。

『サス、ここは政府船だぞ。それこそ相手は軍隊だろうが。気合でこそ負けるわ』
トラはそれきり口をすぼませる。

反してすわっていったのは、サスの目だった。

『ならちよつとおまえさん、のぞいて来い』

『な、わしが、か？』

言われように、トラは大いにトラはのけぞる。

『そうじや、中はもぬけのカラかもしれんぞ。それこそ通り抜け時じや』

『なにを、わんさと詰めておつたら、わしが見つかる』

『その時は、逃げればよいじやろ』

『簡単に言うな』

『うーむ。まさか、こうなつとるとはの』

などとサスが話を逸らしたのは、わざとで間違いない。

『ええい、どうもこうも埒があかん』

だからしてトラは歯ぎしりしてみせる。

『お、お前さん、のぞく気になったか？』

ここぞとばかりサスが振り返っていた。

『違う！』

などと思わず声を荒立てた瞬間だ。警報は破裂したかのごとく鳴り響く。ふたりの周り、通路の壁面を造語文字と記号は走り抜け、続けさま、そんな通路をこま切れにして照射熱が上がったウィルスカーテンは、幾枚も下ろされていった。

光景に飛び跳ね驚き、トラは自らの口を塞ぐ。

『おまえさん、声がでかい！』

身を縮めて屈みこめば、その口元へサスもまた手を重ねた。

『す、すまん』

だが謝ったところでもう遅い。兎にも角にも探すのは、逃げ場だろう。だがあれほ

ど苦勞を重ねて移動してきた空調スペースの入り口はもう、降りたウイスルカーテンの向こうとなつてしまつてゐる。慌ててサスは尻ポケットから電子地図を引っ張り出した。あいだも警報は鳴り続け、聞かされながら地図をスクロールさせる。トラがそんなサスをかばうように立ち塞がり、腰に下げていた警棒を抜き取つた。身を沈めて構えたなら、間髪入れずその耳へ、保安所からのくぐもつた物音は近づいてくる。

『サス、どちらだ？ どちらへ行けばいい？』

痺れを切らしトラは口走つた。

『ええい、どちらへ行つても良いことなどないと言つたらどうする？』

地図と格闘しつつ鼻溜を振り返すサスのそれが本音だ。その間にも物音は複数の足音へ響きを変え、しかも重装備で押し寄せる団体の物々しさをまとつていった。

『言つてゐる場合ではないぞ！ ダメだ。こつちへ来ている』

再び角からそうつと通路をのぞき見たトラは、口走る。

防弾服とミラー効果装備一式に身を包んだ見るからに保安部隊は、まさにT字路の角から姿を現してゐた。

トラは後じさる。

もう待つたはない、と半ば手探りでサスの体を引き寄せにかかった。

ままに小脇に抱え上げる。

きびすをかえすべく、その息を詰めた。

『焦るな、テラタン』

声はそのとき、かけられる。

浴びたトラの背筋は凍りついていた。

抱えられたサスもまただ。

ままに、トラは声の方へぎこちなく振り返っていった。

そこには軍服を着込んだ『バナール』が立っている。特徴でもある青白い顔がさらに青白く見えるのは気のせいか。やけに削げた頬が、鬼気迫る凄みを醸し出している『バナール』だった。おかげで対峙したトラは、一瞬にして射すくめられてしまう。

『確か、トラ・イアドだったな』

前で『バナール』は言っていた。

『だ、誰だ』

トラの動揺へ拍車はかかる。だが答えず『バナール』は、そんなトラの腕を引き寄せ声を低くした。

『静かに』

やおらダイラタンシーショットガンを携えた保安部隊が、脇道になど目もくれず駆け抜けてゆく。見送り、『バナール』は口を開いた。

『アーツエのアズウエル前ですれ違った。貴様は気づいていないだろうがな』

教え、懐から銃を抜き取る。そうしてぽかんと聞き入るトラの前に出た。先ほどトラが顔のぞかせた角へ擦り寄ってゆく。

『それはアルトの……、アルトのスタンエアではないのか！』

気づき声を上げたのはサスだ。

『お前さん、アルトを知っておるのか？』

『アルト？ セフポドのことか』

通路の様子をうかがう『バナール』の返事は、片手間だ。

わずらわしくなり、サスは抱えるトラへ降ろせと体を揺すってみせた。

そんなふたりへ『バナール』は振り返る。

『わたしがそこへ通してやる。奴が立ち寄るだろう部屋は抜けて左、道なりに奥へ進んだ二つ目の四辻、その向こうにある。そのドアにだけ、後づけで磁気錠がつけられている。すぐわかるはずだ』

言い分は、少なからずサスとトラの目を点に変えていた。

『ど、どうということじゃ？ お前さん、その格好からして連邦の者じゃろう。わしらが何者であるのかを知っておるなら、手を貸す道理などあるはずなのでは……』

むしろ有難いを越えたその申し出は、不気味でしかない。ついぞ問うサスに、トラも隣で激しくうなずき返してみせた。

『何も、貴様らを助けようとしているわけではない』

『バナール』は勘違いするなといわんばかりに返して、スタンエアの銃床を叩く。補填されてゆくガスに、スタンエアの立てるか細い音がサスの耳にも届いた。

『わたしは、わたしの意志を通してただ。貴様らを奥へ通すのは、その手段に過ぎん』

手早く動作を確認し、『バナール』は安全装置を弾き上げる。

『そこで待っている』

聞かされサスとトラは顔を見合わせた。そうして正面へと向きなおる。『バナール』の姿はすでにそこから、消えていた。

残してシャッフルは、スタンエアを腰に通路へ出る。

立場を剥奪されてなおこの階級章が生きているということは、使用痕跡から足取りを掴むため以外、考えられなかった。だからしてさしずめ駆け出していった先ほどの分隊員たちも、利用して使用した階級章のアクセスを探知、確保のために飛び出していったハズだとよむ。

ゆえにここでもまた、あえて階級章を保安所ドアのリーダーへかざしていた。正体を晒したうえで入室してやる。

『ち、中尉！』

鋭い音と共に開いたドアの向こうに、衝立で区切られたいくつかのスペースを携えた保安所は広がる。声はすぐ左手、壁面に埋め込まれた艦内警備通信網を監視していた分隊員から、上がっていた。コントロールスクリーンから、たちまち驚き振り返ってみせていた。

顔へシャッフルは、たしなめうなずき返してやる。あえて大げさなまでに片足を引きずると、両手を挙げて中へ踏み込んでいった。

『分隊長は今の警報で出て行ったのか？』

一部始終に、衝立の向こうからフル装備の分隊員たちも三体、飛び出してくる。その顔はまるきり状況が理解できていない、と言わんばかりだ。それでもどうにか引き

締め、警戒心丸出しとダイラタンシーショットガンをシャッフルへ突きつけてみせた。

『す、速やかに投降していただき、恐縮です。中尉』

狼狽ぶりは、すでに奇襲をかけられたようなあんばいだ。見据え、シャッフルは言
い放った。

『所詮、狭い船の中だ。この足で逃げ回ったところで、たかが知れている』

『分隊長は、先ほどの警報の確認に向かわれました。わたしどもが代わって、迎える
船がくるまで待機いただくお部屋へご案内いたします』

言うが、クレッシェの部屋での失態を知っているだけに、分隊員たちはそうやすや
すと近づいてこない。遠巻きに見守りながら、じわりじわりとシャッフルとの間合
いを詰める。

『ついでに傷の手当も頼めるか？』

眺めながらシャッフルは申し出た。

『お部屋へ。手配させます。その前に……』

分隊員が促す。

『隊長から奪ったスタンエアを、こちらへお渡しください』

それも想定済みだ。

『落とした』

うそぶく。

と、それまで遠慮がちだった背後の一体が、突きつけていた銃口を下ろすや否や、シャツフルの胸元と腰周りをまさぐり始めた。あっけなくもスタンエアは取り上げられ、見て取った正面の一体がショットガンの銃口で、くぐってきたばかりのドアへシヤツフルを押し出す。

『こちらへ』

傍らで通信担当者が、飛び出していった分隊長らへ事態を知らせていた。

無論シャツフルには、どれほどの時間で彼らが戻ってくるのか、予想はついている。ゆえに、カウントダウンはそこで始められていた。

まさに保安所を出る。

その周りを三体の分隊員たちが囲った。T字路を折れることなくシャツフルへ直進を促す。

背後で閉りゆく保安所のドアが、腑抜けた音を立てていた。

その音は同時にシャツフルへ今だ、と合図を送る。

受けてシャツフルは、引きずる足によりめいてみせた。

『少し休ませてくれ』

懇願する。

仕方ないという空気が流れたのは、錯覚ではなかったろう。

だからして引きずられていた足はそこで、彼らへ向かい空を切る。

そうしてトラとサスの前に、両肩の防具とセットになったミラー効果装備一式は投げ出される。

『使え！ もうすぐここを保安所へ戻る分隊員たちが通る』

『紛れろと？』

息を乱して『バナール』は言い、驚きトラはシワを波打たせた。

『確かめるようなことではないだろう』

つき返した『バナール』が、やおら背後へ振り返る。

飛びつかんばかりだ。その足元に投げ出された装備一式を、サスは拾い上げていた。『何がどうなつとるのかは知らんが、恩にきるぞ』

T字路には『バナール』に奇襲をかけられた隊員たちの足音が、交錯している。それは『バナール』の後を追う音と、保安所へ駆け戻る音に分散していた。

追い立てられ、おっつけトラもサスからミラー効果装備を奪い取った。急ぎ、両肩

へ乗せる。だが防具は襟巻きのように首の辺りにちよこん、とぶら下がるばかりだ。トラには小さい。いや、小さ過ぎた。見て取りさすがの『バナール』も、間の抜けたその格好についぞ吹きだす。どうにか隠してうつむいたなら、トラの胸板を叩いて返すと同時に。保安所とは逆の方向へと駆け出していった。

『笑うな！』

すれ違いざまトラが吐きつけたとして、それ以上、関わっておれる時間がない。手探りさながらどうにかミラー効果を作動させる。ヴンと唸り声を上げた装備にトラの姿は、すぐにも背後の壁に塗りつぶされていった。

『出とる！』

見つけたサスが指さしたのは、ミラー効果の有効範囲から飛び出し宙に浮いていたヒジだ。トラが引つ込めたならサスもまたそんなミラー効果の中へ、いや、トラのまたぐらへと言った方が正しいか、転がり込んだ。

間髪入れず分隊員は、そんなふたりのいる脇道へ飛び込んでくる。おそらくはこの装備を調達した張本人、『バナール』を追ってだろう。ふたりの前を駆け抜けていった。かと思えばその後からも、さらに数体が姿を現す。加えて警報の音に飛び出していった分隊員たちもまた戻ってきたなら、一団は『バナール』を追うグループと、そ

のまま保安所へ戻るグループに別れた。

おかげでもうトラとサスの周囲は、分隊員たちで飽和状態だ。実体までもが消え去ったワケでないなら、ぶつからぬよう息を吐き出し身を細め、トラとサスはミラー効果の内側で上下、目を合わせる。

つまるところここから先は、昔なじみが物をいう二人三脚だった。懐かしの初等教育過程大運動会さながら、心の中で上げた、えっさほいさの掛け声がハモる。

ままだにタイミングを見計らい、ふたりは脇道の角から抜け出した。保安所へ戻るグループの最後尾につく。なだれ込む分隊員たちの後につき、見えぬ足で保安所内へと潜り込んでいった。

（どないです？ ボス）

薄く開いたドアを挟んで、一体が指を折っていた。

ドアの隙間からのぞきこんだテンの目は、右から左へ辺りを舐めてしばし動く。

（誰も見えへん）

送る合図。

（いくぞ）

振ってスルリ、テンはドアの隙間をすり抜けた。

そこにメジャーが、残る一体が、平然と続く。

身を潜めるでもなく走り出すでもなく、三体はラボ見学にでも詣でるかのようにつたり通路を進みながら、着込んだラバースーツと一体化した、一見するとフードのような形のガスマスクを被りなおす。腹ごしらえをするため脱いでいたそのジツパーを、歩きながらアゴ先まで引き上げていった。

（連れて、帰れるでしょうか……）

メジャーが控えめに振っている。

（あいつだけやない。取引を中止するんや、場合によったら、あのヒトも連れ帰る）
答えるテンの動話は、頑なだ。

来るときは左に折れたその通路を、テンたちは右へ向かう。始められた作業のせいか、通路へも慌ただしさは漂っていた。

だからなんだ。

テンは目指す処置室だけを睨み付ける。

ここを出る。

眉間へ力を込めていった。

閉めたドアの前へ、ネオンはロッカーを立てなおす。叩いたその手は、やけに景気のいい音を立てていた。

「こんなところで、もたついてなんてられない……」
個のままにつなぐ要となることを。

言葉は、『アズウェル』を思い起こさせてやまなかった。そしてそれこそがこの手に足に体に、望まれ、守られてきた役割なら、台無しにしてはだめだと思う。

抜け出さなければ。

なおさら焦り、爪を噛んだ。

気持ちを逸らせて、磁気錠のコイルはそのとき電圧を解く。

ドアがふい、と浮き上がっていた。奥から白衣は二人、姿を現す。

『レディーの部屋なんだから、入るときくらいノックなさいよ』

チャンスかもしれない。思えば先制攻撃だ。ネオンは噛み付いた。だが意に介さない彼らは、どうやらそれが攻撃であることすら認識していないらしい。

『こちらへ』

眉ひとつ動かすことなくネオンへ歩み寄った。その背を押して、ネオンをベッドへ移動させる。力に加減はなく、振り払うように身を揺すれば、目指すベッドへもう一人に無理矢理座らされる。その足元で、携えてきた道具箱は開かれていた。

『何よ、ヘンなもの打つ気なら、アル……、セフじやなきや、絶対にさせないから！』いきまけども、相手にされなければそれほど無意味なものはない。次の瞬間にも手際よく、ネオンの片腕へ筒状の機材は通される。

『何すんのよ！』

『再矯正にかかります。準備にお付き合ってください』

ぶう、と膨らんだ筒状の機材がネオンの腕を締め付けた。

『血圧、脈拍、s p o 2、正常値』

とたん腕に巻かれた機材の中でチクリ、痛みは走る。

『血糖測定中。サンプルDNA採取』

『あたしに無断で……！』

言いかけるが遮られる。耳元で、パチンと指は鳴らされていた。驚いて振り返ればフラッシュが目の前で焚かれる。

「ぎゃ」

『網膜パターン、採取』

焼け飛んだ視界にネオンは目を回し、その腕から早々に測定器は抜き取られてゆく。かと思えば今度は強引にあごを掴まれ、開いた口の中へ棒のようなものを差しこまれていた。白衣が喉の奥を、近づけた顔で惜しげもなくのぞきこむ。

『一八〇秒コンド経過。白衣にも感染反応なし』

足元のダストボックスへ、用済みとなったそれを投げ捨てた。

『ぺっ、ぺっ』

大げさなまでに吐き出して、ネオンは不快を表してやる。なら用は全て済んだらしい。早々に立ち去ろうとする白衣たちは、身をひるがえしていた。させてしまえば、あったかもしれないチャンスはもうない。

『矯正なんて、させないから！』

ネオンは慌てて、口を開く。

声に二人は、振り返っていた。浮かべているのは、何を言い出すのかといわんばかりの素っ頓狂な表情だ。見せ付けられてネオンは自らの非力さを思い知り、ならば、とあれほどまでに逃げ回った『フェイオン』を思い出すと、まさにアルトを真似て奥

歯へ力をこめた。白衣へ踊りかかるべく、ベッドから飛び降りる。

が、慣れないことはするものではない。その足はものの見事に羽織る白衣の裾を踏みつけていた。

「ふんぎや」

飛び掛る以前、転んで己がのされてみる。

目の当たりにしたとして、白衣たちに笑いも罵りも起きはしなかった。ただネオンをその場に残し、再びドアへ歩き出す。

「ちよ、と、待ちなさい、よお」

それこそ無力の極地から、ネオンは声を搾り出した。どうか彼らを押しとどめようと知恵をめぐらせるが、思い浮かぶものがもう、それしかない。だからして何であろうと意を決する。

「この、エビの尻尾野郎っ！」

それはトラから幾度となく浴びせられ、『フエイオン』でトラへ食らわせたフレーズだった。ぶちまけたなら白衣もそこで、動きを止めている。トラのように激怒するかと期待していた。だが様子はまるで異なると、しばしの間を置き白衣たちは笑い出す。

『テラタンの言語だな』

一人が言っていた。

『お前は美しい、だと』

はつきり造語でそう訳してみせる。

「……へ？」

聞かされネオンの目は、やおら点へと縮んでいった。

『どこで覚えたんだろうな。矯正をかけるのがもったいないほど個性的に仕上がっているんじゃないのか？』

『まったくだ』

領き合い、白衣たちはチラリ、ネオンを盗み見た。今にも噴出しそうに笑いを堪えながら、それきり部屋を出ていった。

ポツリ、ネオンは部屋に取り残され一人、瞬きを繰り返す。

「なによそれ」

こぼしていた。

そして改め、繰り返す。

「……なによ、それ」

ままに言葉を、頭の中で辿りなおした。

だがその意味こそ変わりはしない。

「何なのよ、それ！」

おかげで怒りは、頂点へ達する。まかせてネオンは腹から叫んだ。

「どういふことなのよおつ、それっ！」

空に説明を求める。

とたん、応えてそれは訪れていた。唐突にジリリと磁気錠のショートする音は聞こえ、ドアは再び開け放たれる。だがそこに、開けた何某の姿はなかった。

「なに？」

我に返ってネオンは呟く。

前で、風景が剥がれて揺れ動いていた。やがて思いもしない姿をそこに、あらわとしてゆく。

「ネオン、迎えにきたぞ！」

立っていたのはトラだ。

『アルトもおるのかの？』

サスが、そんなトラの両足から顔をのぞかせていた。

見上げてネオンは、ただ言うしなくなる。「……ウソ」と。

「なんつ、ど、どうしてこんなところにいるのよっ!」

袖のかぶった指を突きつける。それこそ『ヒト』語で、ネオンはわめいた。
だが、ドアから磁気鍵を筆記取ったトラの顔は、渋い。

「声がデカい……!」

慌ててサスも外をうかがい見た。

「大丈夫じゃ」

急ぎ、ドアを閉める。

経てネオンへ向きなおったトラの声は、そこでいつも通りを取り戻していた。

「勝手にアーツエで仕事など取りおつて。迎えに行くと言ったではないか! ま、まだ借金が残っておるのを忘れたか!」

浴びせかける。

「何が、借金よ……」

前で、やおらネオンの肩は小刻みに震えた。うつむき吐き出した言葉は呪文のようで、ままにゆっくり身を起こしてゆく。

「なあにが、エビの尻尾よ……」

突きつけていた指を固く握り絞めたなら、その顔は勢いよくトラへ持ち上げていた。「だいたいなんで今なのっ？ ヒトが心底、困り果ててるって時にあんたは、あんたってひとはあつ！」

『一体どうしたんじや？ 早くアルトを探して逃げんとマズいことになるぞ』

まくし立てる勢いに、『ヒト』を理解できないサスが、ともかく急げと鼻溜を振る。向かつてうるさい、ネオンが睨みつけていた。

『な、なんじや？ 何か、悪いことでも言ったか？』

刺されてサスはあとずさり、ネオンはその目をすかさずトラへ振り戻す。そうして歩み寄れば足取りは、素足ながらまるで鉛の入った安全靴でも履いているような重さで床を踏みしめていた。トラの前でピタリ、立ち止まるや否や、折り重なるシワごとトラその胸倉を掴みあげる。

「ちゃんと説明なさいよっ！」

などと、揺さぶり押し迫る気迫は並大抵のものではない。

「な、何のことだ」

食らってさすがのトラも、どもってみせた。

「何がじゃないわよっ！ エビの尻尾野郎の意味に決まってるでしょっ！ あたし知

つてるのよっ！ 『お前は美しい』ですってっ？」

間に造語を挟みこむ。ようやくそこで聞き取れたサスの耳が、加齢に寝ていたそこからぴん、と跳ね上がった。

「ど、どこでそれを？」

「どこだっていいでしょうがっ！ それより一体、どういうことよっ！ あなた、あたしをそうやって、ずっとからかい続けてたわけっ？ 意味なんて分からないと思っで。一体どこまで人をバカにすれば気が済むのよっ！ ふざけないでえっ！」

モニター越しではないこの会話を、それこそスイッチひとつで切ることとはできなかった。聞かされたトラの瞳は、とたん縮み上がる。いや違うと辛うじて繰り出した瞬きで遮ってみせた。

「か、からかってなど、わしは、おらん！」

「じやなきや、何なのっ！」

「な、何と言われても」

それこそが口に出せないトラの秘密だ。

「なによ、お金のためにこんなトロコまで追いかけてきちゃってっ！ あなたなんて、あなたなんてそうやって一生、ギルドにへいこらしてればいいのよっ！ だからっ、

あたしはもう、そんなあなたの鬱憤晴らしに付き合うつもりなんて、ないんだからっ！」

掴んでいたトラの体を突き飛ばすようにして、ネオンは手放していた。勢いにトラの皮膚は支離滅裂と揺れ、心も乱れて、それこそ千々と揺れ動く。

「そ、それこそどういう意味だ！」

口走っていた。

「いつ、わ、わしがギルドにへつらった！ 取引が小さかろうとも、わしはきっちりわしの店を仕切っておるわ！ もちろん金は大事だ、が、お前に比べ……」

いいかけて飲みこむ。ぶるん、シワを震わせた。そうして行き場をなくした言葉の代わりだ。トラはその場で地団駄を踏む。

「ええい、しち面倒くさい！」

たまりかねると同時だ、ネオンへその腕を伸ばした。

「おとなしく帰るぞ！」

ネオンの体を丸太がごとく掴み上げる。肩へ担ぎ上げるのに、まるで時間はかからなかった。

「何するのよっ！ やだっ、離してっ！」

だからして拒むネオンがトラの肩で両手を突っ張る。

「でないと、通路で思いつきり叫んでやるっ！ この詐欺師いつ！ あたしはモノじやないっ！ 降ろしてえっ！」

「うるさい！ つべこべいうな！」

これではもう助けにきたのか、さらいに來たのか、よく分からない。

『こら、待たんかトラ！』

見かねたからこそ、サスの出番は訪れていた。いさめる調子はいつになく強く、続けてサスはどうも鼻溜を振ってみせる。

『お前さんは、どうしてそう物事をややこしくしたがる！ いい加減、素直に思っておることを口に出せばどうじゃ！ それで全て済むことじやろうに』

とたん動かなくなつたのは時間ではなく、トラだ。

担ぎ上げられたそこで尻を向けていたネオンもまた、素っ頓狂な顔でサスへと振り返る。

『思ってる、こと？』

見上げるサスは、そこで両手を腰へあてがっていた。小さな体をめいっばい反らせた様子は、さしずめ猛獣使いと言ったところだろう。

『まったく何をごちやごちややっておる。嫌われようとしるのは、お前さんの方ではないか』

遠慮なく鼻溜を振れば、トラの体は瞬間、きゅつと縮んでいた。

『わしは知つとるんじやぞ。お前さんがネオンを見つけてからヒト語を勉強し始めたことも。ヒトと地球の歴史や文化を一生懸命に調べておったことも。それもこれもネオンのためだったんじやろうが。それでよいではないか。だのに、イザとなれば憎まれ口ばかり叩きおつて。誰が自分のためにそこまでする者を嫌うと思う？ 嫌うところがあるとすればの、それはお前さんのその意気地のないところじや。いい加減、覚悟せい！』

だが、さつて担ぎ上げたあの勢いはどこへやら。トラに動き出す気配はない。

サスは、十分すぎるほどそんなトラを待ち続ける。やがて何一つ、解決しそうになかったなら、そこで黙っていよ、といわんばかり一つ大きく、息を吐きつけた。

『わしが代わりじや。謝っておこう』

開いた眉間で、トラの肩で啞然としているネオンへ鼻溜を振る。

『借金があると言う話じやがの。あれはお前さんを手元へつなぎとめておこうとした、こやつ我真つ赤なウソじや。長い間、嫌な思いをさせたようじやの。すまんかった』

話はネオンの目を、これでもか、と見開かせてゆく。

『じゃが放置船から見つけ出されたというのは本当の話じゃ。トラがお前さんと出おうたのは、その後の種別臓器転売オークションでの。こやつ、誰にも買われまいと慌てた挙句、ケタをひとつ間違えて競り落としおった。じゃから、お前さんはトラの元おることとなったわけじゃ。当時は素性も分からんボディーじゃったからの。ついた破格の値は、噂になって、わしのところまで回ってくるほどじゃった』

サスの目は、そこでちらり、トラを盗み見る。だがトラはまだ、なんら反応を見せない。

『トラがそこまでしおったそのワケと言うのがの』

仕方あるまいと、サスは告げるべき言葉に鼻溜を膨らませた。

瞬間、悲痛なまでのトラの声は上がる。

『分かった、もういい!』

トラの体から、がっくり力は抜け落ちていた。ままにうなだれ、惜しむようにゆっくり肩からネオンを降ろしてゆく。乱暴に担ぎ上げられた時と違い、ネオンの足は静かに床を捉えていた。

『……借金は、ウソ? ギルドじゃなくて、あなたのウソ?』

後じさつてまじまじと見つめるネオンのその目は、まだ丸いままだ。

前にしたトラは、噛み締めた奥歯のせいで、顔のシワヘシワを重ねている。そうしてネオンが見つれば見つめるほどに、逃れてうつむき、シワの中に埋もれてさえいった。

と、見えなくなつたそこから、やがたえ声は絞り出される。

『ワケなどわからん。わからんが……！』

何が始まるのかと、ネオンは息をのんでいた。

『わ、わしはあの会場でお前をひと目見てから、その、あい、え、たつ、と、とても美しいと！ わしの知る限り、テラタン輝石のエビの尻尾よりも美しいと、思ったのだっ！』

トラの声は絶叫に近い。

『だというのに臓器転売ボディだなど、他の奴らに買われでもすれば跡形もなくなる。だからわしは慌ててお前を競り落とした。よかった。そう思った。だからしてそれからしばらくの間わしは、ただお前を部屋で眺めて過ごした。だが、そもその間違いはそれだ』

どうして、と思えば絞り切った雑巾のような中からトラの小さな目が、のぞいてち

よろり、ネオンをとらえた。すぐにもシワの中へ埋もれて消える。

『眺めれば眺めるほど、わしはお前が一体どんな声で話すのか、どんな瞳をして、どんな顔で笑うのか、知りたくてたまらなくなつた……。知りたくて、言語も文化も一通りに目を通した。そこで互いの美的感覚が合はんことを、わした痛感した。おそらくお前を起こしたところで、わしは嫌われる。だが、見たいものが見られるなら、それでもいいとわしは思つた』

『それがあたしを蘇生させた理由？』

うなずき返したようにも見えたが、トラの動きは判然としない。

『ただ始終……。』

話だけが續いていた。

『ただ始終、嫌われていると感じることだけはたまらなかつた。ならば外へ出してしまおうと……。お前にとつても一緒に入つていたあの稀少品と共に、わしから離れたところにおる方がいくらか心地よい良いだろうと、考えた。借金があると繋ぎとめておけば、ときおりだろうと声は聞ける。それでかまわんと演奏に出した。金額を減らせなかつたのは、そのためだ』

『それでしょつちゆうダブルブッキングなんて……。』

『何もお前をモノ扱いしておるわけでもないぞ！ テラタンとヒトの寿命は一・三倍の開きがある。お前の年齢が分らん以上、短命なヒトであるお前に先に死なれなくてはなかった。だから移動に仮死強制を選んだ。それだけのことなのだ』

吐き切ったトラの体は最後、ついたため息にふうと膨らんで元の大きさへ戻ってゆく。

『わしは……、理由などわからんが、わしは間違いなくお前が好きだ』

戻った体が紡いでいた。

『オークション会場で見つけた時から、何があっても手放したくないと、思った』

そうしてちらり、シワの間からまた怯えたような目がネオンをとらえる。

『誓って言う。からかつてなどおらん。その思いもこれで終わりとなった。だが、だからこそわしは、ここまで来た』

それきりトラは、返したきびすでネオンへ背を向けた。

隠しようのない大きな背中が、ネオンの前に壁とそり立つ。見つめたなら、憤りが罪悪感へ変わるなどと、それもまたネオンにとって慣れたものではなかった。

『……そんな』

しかもそうして積み重ねてきた時間は長すぎ、つぎ込んでまで大事に育て続けたそ

れこそ、無駄を極めた誤解にほかならなかった。

正さなければ。

思うままにネオンはトラへ手を伸ばす。だが触れかけたところで感じた恐れに、ネオンもまた己が手を引き戻していた。

『ひねくれてはおるが、分かつてやってくれんかの？』

後押しして、サスが鼻溜を振ってみせる。振り返れば、詫びるようにネオンを見上げて微笑む顔は、そこにあった。その笑みがネオンを少しばかりほっとさせる。気づけばサスへ、小さくうなずき返していた。その目をもう一度、トラへ持ち上げる。

『……そうだよ。見つけてもらえなかったら、ここにいなかったかも、なんて考えてもみなかった』

サスがその傍らで、しきりにうなずいてみせていた。

『ありがとう』

今まで一度も口にしたことのなかった、それは言葉だ。

『借金があるうとなかろうと、起こしてくれたのなら本当は最初に言っておくべきだったのに。遅くなってごめん。あたし、自分のことが分からなさ過ぎて、自分のことばかり考えて、子供みたいで、そんな簡単なことに全然、気が回っていなかった

みたい』

と、やおらサスはトラの前へ回り込む。力任せだ。その体をネオンへ向きなおらせた。なら向かい合ったそこでトラは、返事をしているのか唸っているだけなのか、うつむき潰れた喉の奥から、たった一言、絞り出す。

『うむ』

向かってネオンは、眉を跳ね上げた。

『そうなのっ！ あなたが大事に思ってくれたから、あたしはこうして動いて話せるのよ』

だがトラの返事は変わり映えしない。

『う……、む』

『お前さんはそれしか言えんのか』

つつこまれて、しばしトラに悩むような間は空いていた。

『う、うむ』

結局、答える。

『まったく……』

呆れてサスはため息をつき、それでもかまわないとネオンは続けた。

『あたしはさ、トラ。あたしは言うことを聞かない自分の不便を呪ってただけで、その原因はあなたに、ギルドにあると思ひ込んでた。全部、借金のせいだと思ってた。けど違うの……。その、好きとか嫌いとか、わたしには分からないよ』

言葉が、トラの顔を少しばかり持ち上げさせる。

『だって、あなたのついた嘘の色メガネを取れば、わたし、あなたのことは何も知らないもの。わたしを起こしてくれた恩人っただけで、それくらい大事に思っていてくれたって事だけで、ほかは何も知らない。知らないのに、好きだとか嫌いだとか、そんなこと言えないよ』

『ほ！』

とたんサスから声は短く上がっていた。

トラもまたアゴをシワから引き抜き、まじまじネオンを見ている。

ネオンはそんなトラの目の奥へと、微笑みかけていた。

『聞いて！ あたし、自分が誰だか分かったの』

それはまるで昼下がりの大冒険を、自慢げに話す子供のような笑みだ。

『だからもう不自由だって当たるのはおしまい。ちゃんと話し合うこともできる。理解だってできる。そう、だからやりたいことだっけ見つけたのよ。そのためにもここ

から絶対に出たいって思ってる』

そうして『ねえ』とネオンはトラへ、呼びかける。

『それって、考えはあなたと同じだとは思わない？』

瞳は挑発的と輝き、聞いてサスが、とたんよつしや、と手を打ち鳴らす。

『ここまで来てくれたんだもの、トラなら手伝ってくれるわよね？』

しかし、素っ頓狂な顔をしたままのトラにこそ、反応はなかった。見かねてサスが、その尻を叩きつける。ぎやふんと巨体を跳ね上げたトラが、我を取り戻していた。なら答えはもう決まったも同然だ。トラはシワを揺らしてかぶりつかんばかり、ネオンへ答えて返す。

『も、もちろんだ！』

そしてアルトは、矯正開始までの時間を計算する。

リンクルームへ消えたトパールを背に、ネオンの眠る部屋へ向かった。

勝機があるとすれば、それはまたもや賭けとなるだろうことを、ただかみしめる。

だが座して物理解体を待つことに比べたなら、賭けるに値する残されたたった一つの

策だと思えていた。

胸の内ではトパルの言っていた、シャツフルの身の上もどこかで引つかかっている。クレッシェの部屋をかすめ、三叉路を直進し、オフィス前を過ぎた。プロダクトルームの手前で通路を逸れ、並ぶ同型のドアに磁気錠を探す。

と、その目は一点を睨んで細められていった。掛けたはずの磁気錠がないのだ。周辺には焦げ跡と、もぎ取られたらしき形跡だけが残っていた。

どうということだ。

アルトは駆け寄り辺りを見回す。

開くその前に身構えた。

センサーへ手をかざし、開く。

「ったッ。ん、だあッ」

たまらず声をもらしていた。何しろ見てはいけないものを見たのだから、仕方ない。仰け反り慌ててドアを閉めなす。改め、頭の中で状況を整理すべく反芻し、自らを落ち着かせにかかった。

果たしてあれは幻か。

確かめるべく再度、ドアを開ける。

がそこに、ネオンとサス、サスの店でちらりモニター越しに見たあの『テラタン』は、いた。しかも頭を寄せ合い、なにをや意気投合していたりする。成り行きこそアルトに理解できるはずもない。ゆえに目の当たりにした開口一番は、ネオンと同じになる。

「な、なんでこんな所にいやがるッ」

髪を逆立てアルトは吠えていた。

『おお、アルトではないか！ 探しておったぞ！』

とたん、千切れんばかりに鼻溜を振ってサスは駆け出していた。

『おいッ、じいさん。鍵はどうした、鍵はッ』

これでは明らかに不審者が侵入しましたよ、と言わんばかりだ。再会をどうの言っている場合ではない。アルトは唸り、勢いを削がれてあからさまと不満げにその顔をしばせていったサスが、背後のトラを指さした。

『こやつが筆り取っておったがの』

『だーッ、早く戻せ。もうすぐラボの奴らが矯正の準備に来るつてのにッ。バレちまうだろうがッ』

ならそこがお決まりの場所らしい。トラはシワの間へ押し込んでいた磁気錠をいそ

いそ引っ張り出す。

『はい』

などと、なぜかしら挙手するネオン。

『いちいち、ひつようねえッ』

ドアのススを手のひらで拭い取り、磁気錠を押し付けなおしてアルトは唸った。

『もう来たわよ。白衣のお兄さんたち。血圧と脈拍と血糖値と、えすおーえす？ はかって、DNA採って、ピカッて光って、ム力つくほどあたしを無視して帰ってった』
指を折りつつそらんじるネオンの口元は、思い出す不躰な数々の行いに、への字と曲がつてゆく。

ドアを閉めなおしたアルトの足は、そんなネオンへ一直線と繰り出されて行った。

『話がある』

『なに、痛いって』

掴んだ腕を抜けそうなほどに引けば、ネオンの上げた声に、やおらトラが巨体をひるがえす。

『何だ、貴様は！』

掴むアルトの腕を振り払った。ネオンとの間へ、その身を割り込ませる。そうして

見下ろせば胸はこれでもかと反り返り、醸し出される威圧感にアルトが眉間を詰めていった。ままに睨み合えば、否応なく互いの間に緊張感は満ちる。

『違うぞトラ！　これがわしの探しておったアルトじゃ』

『そう、あたしをサスの店まで乗つけてくれた、ジャンク屋なの』

察したネオンにサスが、まくしたてていた。

が結局、一言多かつたらしい。

『何、コイツがか！』

トラのシワがぶるん、と波打つ。なにしろジャンク屋と言えば、『アズウェル』でネオンの頭を撃ち抜こうとした輩、としかトラの頭には記憶されていない。

『このヤロウが！』

問答無用でアルトへ踊りかかっていった。だからこそアルトは反射的に、背中のレストランエアを探して手をまわす。だがあるはずもないなら、その手は空をつかみ、しまった、と目を泳がせたそのスキに襟首をわしづかみにされていた。あつた身長差を埋めて、いとも軽々と体は吊り上げられてゆく。壁へ、音がするほど、押し付けられていた。

『違う、違うってば！』

見かねてネオンは絶叫し、サスもトラの腰へ食らいつく。

『全く、このトンチキが、やめんか！』

だがトラにはまるで聞こえていない。

『貴様、わしのネオンへ銃口を向けるとは、いい度胸だ！　だがそうはさせんぞ。わしはそのために、ここまで来た！　金輪際、その汚い手でネオンには、触れるな！』
部屋が揺れそうなほどにアルトを壁へと、叩きつける。

目にしたネオンの大声は、そのとき放たれていた。

『やめなさあいつ、このつ、バカトラあつ！』

やおら針金を通したようにトラの背が、伸びあがる。

『アルトを離しなさいって言うてるでしょっ！　今すぐ離しなさいってば、離しなさあいつ！』

おかげで掴み上げていた手もまた、スイッチが入ったように開いてアルトを離していた。ドサリ、アルトの体が床へ落ちる。トラのまたぐらを潜り抜け、サスが急ぎ駆け寄っていた。

『大丈夫かの？』

ほうって肩ごし、ネオンへそうつと振り返ったトラは、怯え加減がまるきり飼主

に叱られた犬か猫だ。

『銃口に向けたのは本ただけど、それは仕方なかったのっ！　ここへ戻らないためにそう脅しただけよ。引き金なんて引くつもりはなかった。それなのに、あなたってひとはっ！』

『わしはてつきり……』

『言い訳は、後っ！』

『まったく、こんな事をしている場合じゃねえんだ』

打ちつけられた背中をかばいながら、サスの手を借りようやくアルトも立ち上がってみせる。

『何？　話って』

真正面から、そんなアルトへネオンは鋭い視線を投げた。

『いいか、奴らは恐らく今のお前のアタマをマツピングするため、最初、覚醒状態から矯正に取りかかるハズだ』

告げたところでいまさらネオンが、その話に疑問符を飛ばす道理はない。

『イルサリ、ね』

うなずき返しさえする。

するりと飛び出したその名前にアルトもまた、小さく笑って続いていた。

『その間に作業が中断しないようなら、後はお前がやれ』

『やれって、何を？』

唐突過ぎて、言うしかない。

『イルサリに約束の内容を聞くんだよ』

『何？ 聞いてどうするの？ だいたい約束って何？』

などと説明すれば、話は長い。

『何でもいいからとにかく聞け。そうすれば分かる』

だが分かっているのは、ネオンだけとは限らない。さらに深い不可解の底から、タイムを訴えサスが両手を振り上げてみせていた。

『いやはや、待て待て。イルサリとは、あの症候群の権威のことか？ もう、死んだハズじやろうが。そもそもこのF7は何なんじゃ。もぐりこんだはいいが、分からんことだらけじゃ』

言うものだから、アルトの肩も縮んで呆れ返る。

『まったく、それでよくここまでこれたもんだぜ』

『それが、ここの制服を着たバナールがわしらの侵入を助けてくれおつての。ミラー

効果を一式、あの兵隊から奪つてよこしてくれたんじゃない。いや、あのバナールが言うには、それもこれも自分の意志を通すための手段に過ぎんじゃないが』

思い起こしてサスは鼻溜を振った。

『バナール？』

『そいつはお前さんのスタンエアを持つておったぞ。知り合いか？』

問いかけるサスに、アルトの脳裏へそれは浮かんでいた。

『シャツフル、か？』

『ともかく、お前さんはここで一体、何をしておった？ 帰るつもりならわしは手を

貸すぞ。そのつもりでここまで来た』

サスはたたみかけ、アルトはしばし泳がせていた目をサスへ向けなおす。

『連邦の戦略の一つとして、ある研究に従事していた。サスに拾われる前、俺はここで働いていたのさ』

一息つく。

『ドクターイルサリもイルサリ症候群の研究も、ハナから存在しなけりや、連邦は推し進めてもない』

残りを吐き出す準備は出来ていた。

『その名は、プロジェクトに利用されていたAIの呼び名だ。そのAIを使用して、ここではまったく別のプロジェクトが推し進められていた。そう、あんまり世間に大きな声でいえない類の、な』

サスがほうと、感嘆の声を漏らし、トラが心配げとシワにシワを寄せてゆく。

前でアルトは目を伏せ、過ぎた時を手繰り寄せなおした。

『安直にいやあ連邦は、じいさんがデフ6で、そっちがテラタンだ、つてことを忘れさせて、自前で用意した新しいカテゴリーにはめ込もう、つて方法をここで模索していたのさ。その方法として既知宇宙内で初めて共通の話題となった事象、造語普及前、種族間を超えたコミュニケーションツールとして有効性が認められたアナログ楽器とトニック動話を選んだ。その二つを操作することで、誰も彼もをラクに丸め込もうつて大胆な計画を、打ち立てていたのさ。その鍵が、ネオンだった』

ひらいたまぶたで、チラリ、視線を投げた。

何の動揺もなく話を追いかけるネオンは、そうらしいと言わんばかりに聞いている。

『だってのに俺は、そのネオンをここから連れ出した』

話を、サスはしきりに鼻溜をさすりながら聞いていた。

『おかげで奴らは、船賊を巻き込んでまで連れ戻そうとした。なにしろネオンは最初

一体、この計画の成果詰め込んだマスターピース、だったからな』

『なん、だと？ だからネオンは楽器と、その演奏が……？』

シワを押しわけ、トラが目を見開いてゆく。

『それはなかなか刺激的な話じゃの』

真逆と鼻溜を揺らすサスは、落ち着き払ったものだった。

『じゃが丸め込むとはいいいようで、その話、昔は洗脳と言っておった類ではないのか？』

質問こそ、なかなか鋭い。

『ただし過去、それは思想へかけられたものじゃった。じゃがお前さんの話から想像するならば、両方共言語外じゃしの。それはもつと抽象的で、感覚的な部分を浸食するもののように思えるがどうじゃ？』

正解だからこそ、アルトは唇の端を吊り上げ返す。

と隣で、頭を、いやシワか、トラが引つ掻き声を張った。

『だー！ わしに小難しい話はわからん。だが、ここにいるネオンがネオンだ。最初、一体とはどういう意味だ？ わしのネオンは、ここにしかおらんぞ』

なら答えてかえす前だ。アルトは顔を拭う。

『悪いな、サス』

その事実が裏切りに値するのかどうかは、分からない。呼びかけられてサスは何のことか、とアルトへ訝しげな顔を向け、拭ってさっぱりしたような面持ちでアルトは至ってあつけらかんと言うことにする。

『俺もネオンも、ヒトだがヒトじゃない』

『何と？』

『俺は34クルー。ネオンはすでに数え切れないほど生成されている』

トラがつまづきそうなほどに、身を乗り出していた。

『俺たちは地に足ついた一回性のあんたらとはちよいとワケが違う、連邦所有の合成塩基から複製された、デザイン自由な生き物なのさ』

『もう、やになっちゃう』

人ごとのようにネオンが肩をすくめていた。

だがサスに動揺はない。

『おうおう、そら小細工じや。何人おろうと、わしが知つとるアルトは、お前だけじゃからの』

鼻溜を揺らしてくれる。

ただトラだけが、驚きに身を固めていた。

『奴らは世界を俺たちのように変えたがつている。冗談。こつちから願ひ下げだ』

『まったく、やる事が強引なのは、その時からか』

切り返すサスは呆れ顔だ。

『それしか手がないと思えた。ラボ中の職員が仕組めば、抜け出すことはそれほど……』

熾烈を極めた逃走劇を思い出したアルトの表情が、冷えてゆく。

『拳句、地球のあの場所で、へべれけか』

はたいて目を覚まさせるようなサスの言葉は、手厳しかった。

『ここを抜ける時に、いくらか必要だった。それに、当初とは計画が狂っちゃった。おかげでネオンの船を出すために罔が必要になったのさ。そのために乗り込んだ船は、たまたま興奮剤を積んだ配送船だった。向かった地球には遺伝的な興味があつたが、期待外れで仕込んだ遅行性の記憶マーカ―が働くまでの間、あれはあれで十分、役に立ってくれたと思つてゐるぜ』

『死にかけておつたくせに、よく言うわい』

自虐的と笑い飛ばすアルトをサスは睨み、しかしそうも続かず途切れたなら、頬は

いつもの愛嬌に緩んでゆく。

『ま、おかげでわしは命拾いしたあの』

十八番と放つウイंक。

『なら、ここにとどまる理由はないようじゃな』

目が、周囲を見回していた。

受けてかすかに、アルトもうなずき返す。

待っていましたと言わんばかり、サスの鼻溜はそこで大きく膨れ上がった。

『その借りを、これから返す。入ってこれたなら、出られんわけがなからう。お前さんが望む通り、もう一度ここから出るぞ』

振り上げられる指、一本。

『よし、トラ！ スラーへ連絡じゃ！ アルトとネオンを見つけたと伝えろ！』

その時だ。遮り、ドアの向こうから甲高い軋み音は近づいてくる。それが矯正に使用されるポッドを乗せたストレッチャーの音だと気づけたのは、一番よく知るアルトだった。

『きやがった』

つまりうろたえるのは、不審者でしかないトラとサスとなる。

『てっ、撤回じゃ。トラ、ミラー効果を用意しろっ!』

サスがそらそら、と巨体をつつく。が即座に手繰ったトラの姿は消えるどころか、ポトリ、その手元から何かは落ちていた。見れば足元に、二つあった肩あての片方は転がっている。どうやら元々大きさが合わないところを無理やりに装着したところへ加えて、先ほどの乱闘がマズかったらしい。果たして頑強なはずの装備は、トラの首回りに押し潰されてしまっていた。

『の……!』

絶句するトラ。

ネオンもまた短い毛を逆立てる。

『何、壊したのっ?』

『何をしとるか、このすかぼんたんっ!』

ならネオンは声を上げていた。

『違う!』

その目がとらえたのは、塞いだばかりのロッカーだ。

『この奥に部屋があつたのっ!』

走りだしていた。

蘇る記憶にアルトも駆け出す。

『防音室かッ』

取り残されて、トラとサスはしばし顔を見合わせていた。だが次の瞬間、ふたりも床を蹴りつけ走る。